

〈 翻 訳 〉

Montague Shearman 「Athletics」(1911年版)

第 1 章 イギリス陸上競技史

岡 尾 恵 市

訳者はしがき〉

ここに訳出して掲載するのは、Rt. Hon Sir Montague Shearman 著の『Athletics』(1911年1月版)〔Longmans, Green and Co. London.〕の第1章『The History of Athletic Sports in England』(p. 3～p. 55)である。この翻訳は、訳者がライフワークとしてきた「陸上競技規則発展史」の研究の最も基礎的な文献のひとつとして、明治維新以降のわが国の「陸上競技史研究」の先駆的役割を果たしてこられた故山本邦夫教授(当時埼玉大学)から1975年6月にコピーさせて頂き、早速作業に入り『立命館大学人文科学研究紀要・特集保健体育(第25号)』(1977年6月発行)と『同第29号』(1979年5月発行)、『同第31号』(1980年7月発行)の3つの部分に分けて掲載してきたものである。

しかし、当時の訳者の問題意識の濃淡の関係で、本文の通りに順を追って掲載せず、翻訳部分が極めて分散して読みづらい物となってしまっていたために、この20数年間、随分気になっていた。

今般、35年間勤務した立命館大学経済学部を定年退職するのに当たって、改めて全文と注釈部分を精査して、改めて原文通りにその翻訳を掲載したものである。

さて、この『Athletics』というスポーツ書は、(8th) duke of Beaufort, K. G. が編集した有名な『The Badminton Library of Sports and Pastime』〔『バドミントン・スポーツ叢書』1887～1902 全26巻〕のうちの1冊である。これは、はじめ1887年4月に『Athletics and Football』として発刊されたが、1898年11月に『Football』の部分と分冊にされ(『Football』は1899年2月に改定して発刊されている)校正、増補されて再出版されたものである。

1887年の初版本(『Athletics and Football』)は、B5版のわずかに250部の限定出版で、しかも「陸上競技」の部分は、446頁のうち3～264頁と408～421頁に記されているに過ぎないものであった。

独立した『Athletics』は、356頁から成り、その後、1901年7月に章を書き改められ、新たな装いで刊行されたが、1904年10月に再び改訂された。この1911年版は、さらにその再版本(全360頁)である。

著者の Shearman 卿は、St. Jhon's College を経て Oxford 大学を卒業、1881年には24歳の若



さで法学院の一つである Inner Temple に入会し¹⁾、1914年から72歳になる1929年まで King's Bench Division〔高等法院王座部〕の判事をつとめたほどの著名な裁判官であつた人である。²⁾

著者と陸上競技とのかかわりは、Oxford 大学在学当時から、ラグビー選手であると同時に有名な短距離走者であつたことから始つているようである。当時の「記録集」によれば、卿は、1876年19歳のとき、100ヤードを10秒2で、78年には1/4マイルを52秒8、80年には52秒2で走り、それぞれ「アマチュア選手権」を獲得している。また、著者はこの書を著した後、1916年から1929年までの14年間にわたつて、「A. A. A. (Amateur Athletic Association)」の会長を務めるなど、「近代オリンピック大会」が復活され、軌道に乗るまでの近代陸上競技が発展・充実してくるきわめて重要な時期に、その要職にあつて、イギリスのみならず世界の陸上競技界に数多くの貢献をした著名な人である。

ところで、本書のうち、第1章『イギリス陸上競技史』の部分を読出したのは、訳者のつぎの問題関心にもとづいて行なつたものである。

1つは、訳者自身の研究テーマである「近代陸上競技規則発展史」をまとめるにあつて、資料的にもきわめて重要な内容が示されていること。第2は、たんに陸上競技にとどまらず、「近代スポーツ」発祥の地といわれるイギリスにおいて、中世以降、王侯貴族、庶民、農民の間に広く行われていた様々な「Athletic Sports」が、「産業革命」を経たのち、19世紀中葉に、ブルジョワジーやその子弟および教師達によって「近代スポーツ」として再構成され、組織化され、規則がつくられ、発展していく過程が様々な角度から明らかにされているからである。

本来、訳者は、前記のテーマのなかでも、ハードル競走や障害物競走の高さやインターバルの距離、各種の投てき競技で用いられるサークルの大きさや投てき物の重量等を設定してきた規準や根拠は何であつたのかを、19世紀中葉にイギリスを中心として設定された陸上競技規則制定の歴史のなかから明らかにしながら、今日の学校体育の教材としての「障害走(ハードル走)」や「投てき」を指導するにあつての、高さやインターバル、重さやサークルの大きさなどについて、児童・生徒・学生の発育・発達にあわせたものを考える基礎をつくらうとしてきた。その意味から、本章は、様々な資料を訳者に提供してくれた。

さてこの有名な著書が、発刊当時からわが国にすでに輸入され、全国のいくつかの図書館に蔵書として収められていながら、過去、幾人かの研究者の論文のなかに一部引用され、その図版が

紹介されているのみで³⁾、全文の翻訳が紹介されてきていないことを知り、約20数年前に、翻訳の作業に入り、発表したのであった。

この章に記述されている内容のすべてを通読し、19世紀末に Oxford 大学を出たスポーツマンであり、判事でもあった Shearman 卿が、この様にイギリスの古典書から通俗書に至るまで、数多くの文化的・文学的作品に目を通していたことは、全く驚くべきことであり、自ら陸上競技を行う人がその種目について自国の競技史をひもとき、明らかにしようと努力した姿には、全く頭の下る思いである。また、仮に、卿一人がこれら、すべての資料の蒐集をしたのではなかったにしても、当時の卿の身の廻りには、おびたしい資料提供者や情報提供者が豊富にいたのではないかと想像させられる。

いずれにせよ、これらの一文から、過去の数々の「作品」や「誌紙」にもとづくきわめて詳細な記録を通して、イギリスの中世・近世・近代を貫き「近代スポーツ」へと発展してきたスポーツの様子が十分読み取れるし、イギリス人達が、「陸上競技」に対してどのような観方、考え方、行動を示したのかもよく理解できる。

「近代スポーツ」の発展史の研究は今日、様々な形で進められてきてはいるが、現代のスポーツのあり方や将来のスポーツのあり方を考えていく上で、研究がさらに一層促進されなければならない。そうした必要性に応える意味からも、本章の翻訳のもつ意味は大きいと考える。

また当時、訳出に際して、前・立命館大学文学部英米文学専攻の久津木俊樹教授の御指導、御助言を頂いたことを付記し、心からお礼申し上げる次第である。

訳出上の凡例〉

1. 人名・地名は『固有名詞英語発音辞典』(大塚・寿岳・菊野編 三省堂 1973)の発音記号により出来る限り忠実にカタカナであらわした。
2. 本文中の‘ ’は、紙誌・書名を『 』に、引用文は「 」になおした。
3. 競技会・競走・競技・試合等々、日本語できわめて曖昧に使用されている語は一応訳出し、()内に原文を書き込んだ。
4. 訳者による注は1), 2) ...で示して、訳文後に「注」として示した。
5. 距離・長さ・重さ等、「ヤード・ポンド法」での記述の部分は、原文のほかに(=)で「メートル法」に換算して記入した。
6. 文中の区切りの良いところで訳者が見出しを付けた。

はじめに)

「かつて、古代サビニ人は、かの生活をはぐくみたり。

……かくて、勇敢なるエトルリアは、増大したり。

而して、ローマは、世界の最も美しき都となりたり。⁴⁾」

走ることや跳ぶことが、若者にとって、あまりにも自然で、簡単なものだから、笑ったり、泣いたりするのと同じ様に歴史をもたないのだと、よくいわれる。人類が地球上に現われて以来、ランニングの試合(match)は途切れることなく存在していたのだといっても間違いはないだろう。そして、すべての好戦的な国民の間では、今も、身体の強さや速さや持久力の「わざ(feats)」が賛美的となっている。しかしながら、陸上競技の練習(athletic exercises)が芸術(art)にまでに上り詰め、国民生活の特色にまでなったところでは、強さや速さの「わざ」の練習についての興味深い歴史をもっている。イギリスにおける競技スポーツ(athletic sports)の歴史を書くことは、それほど簡単な作業ではない。というのは、私の知っている限りでは、今迄に、本気で、これが企てられることがなかったからである。古物収集家にとって、豊かな宝庫のような仕事をした学者のシュトラッツ氏は、つぎのようなことを読者に知らせるだけで満足している。「競走(foot-race)の古さを強調する必要はない。何故なら、走るという努力が必要とされる場合が、いつでも生じてくるのは、誰にでもよくわかるだろうからである。……おそらく、初期には、競走は、競争(emulation)以外には、或は、せいぜいのところ、わずかな報酬を得るを見込む以外には何の刺激をももっていなかっただろう。しかし、時が経つにつれて、報酬が拡大され、この種の「試合(contest)」は大衆の娯楽として制度化されていった……。グランドが整備されレースの公正さを決め、賞金を与えたりするために、審判員が、決められてきた。」

そうした歴史を書くにあたっての先験的(*à priori*)な方法では、現在のイギリスにおける競技スポーツの形式を満足に説明することにはならないだろう。

われわれの知っている限りにおいて、現代の読者にイギリスの競技の起源を説明しようとしたもう一人の作家は、ギリシャ競技についての素晴らしい論文を書いている。彼は、われわれに、「ある点では、われわれの立場は、ローマ人達の立場のようなものである。競技というものは、われわれにとって、古来からあったものではない。」ということをはっきりと述べている。

今回のわれわれの目的は、この章で、歴史書が遡れる限り、走・跳・投のある競技会(competition)が、われわれの国土に古来からあったものだけでなく、イギリスにおける町や村の生活の主要な特徴にもなっていたことをできる限り示すことである。

このようにして、競技スポーツは、栄枯盛衰の日々を繰り返しながらも、いつでも「楽しいイギリス(Merrie England)」の生活の特徴となり続けてきているのである。

中世におけるイギリス各地のスポーツの様子)

中世の民衆スポーツの資料を貴族達のスポーツと区別して十分に得ることは困難である。ちょうど、ローマの歴史家が、古代のギリシャ人は古代のローマ人と比べて何らすぐれるものではなく、後者には雄弁な年代記作家(chroniclers)がいなかっただけだとの意見を発表しているように、おそらく、一般民衆からもヘンリーⅤ世⁷⁾やその朝臣のような足の速い走者が生れ出たのだら

うが、騎士道の華やかな時代には、吟遊詩人たち (the birds) が、上流階級の人びとの「わざ (feats)」についてだけを年代記に残したにすぎなかった。この王は、「非常に足の速い走者であったので、彼の二人の侍従と共に弓やその他の兵器 (engine) を使わないで、広い獵園で野生の牡鹿を捕えるのであった。」

ヘンリー V 世の時代よりはるか昔に、ロンドンの若者が彼等の夏と冬のスポーツをもっていたことを、われわれは知っている。ロンドン生れのカンタベリーの修道僧のフィッツ・スチーヴァン⁸⁾は、ヘンリー II 世の時代⁹⁾に関して、ロンドンの若者達は、シティー (the City)¹⁰⁾の近くに彼等の割当てられた広場をもち、そこでとくに「跳び、レスリングをし、石投げをし、球技を行っていた」と書いている。走ることに¹¹⁾ついては何ら記載されていないが、跳躍の試合 (leaping matches) のことが知られていて、競走 (running matches) のことが知られていないなどということとは、まず、われわれには想像できないことである。

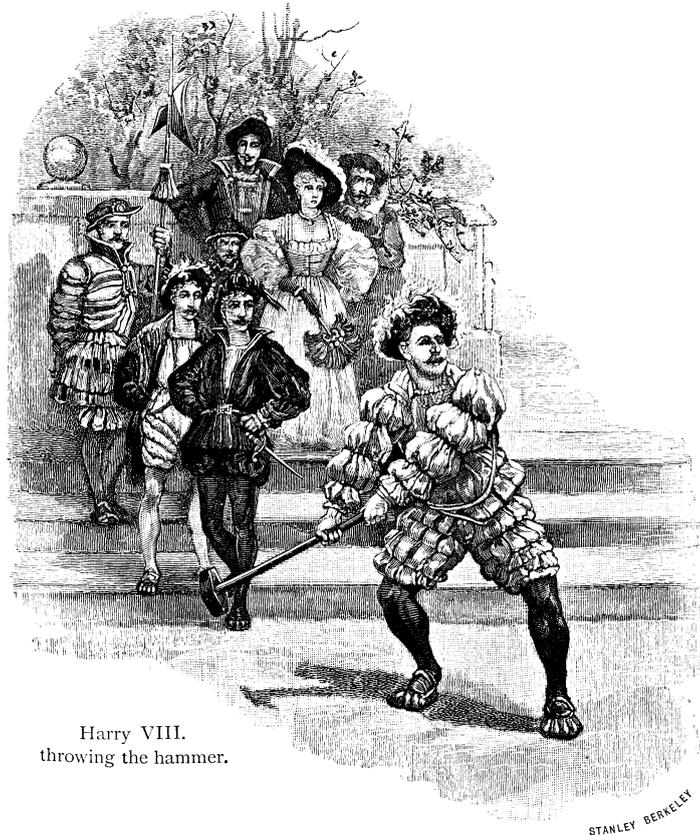
フィッツ・スチーヴァンは決して平凡なスポーツの観察者ではなかった。それで彼が冬の「氷滑り ('sliding' on the ice)」のことを描写したものは、ほとんど『ピックウィック』¹²⁾におけるディケンズの描写と同様に詳細にわたっている。しかしながら、騎士道が華やかな時代には、若い騎士たちは、市民と同様に走り、跳び (jump)、レスリングをすることを教えられた。しかし、これはもちろん、主として軍事訓練として騎士階級者 (equestrian rank) にふさわしく馬上においておこなわれ、それが巧みなものは、貴婦人の微笑みと共に、最大の名誉を獲得したものであった。

ストラッツが引用した物語、『白鳥の騎士』¹⁴⁾の中で、イディンと呼ぶ公爵夫人は、自分の息子達をあらゆる正しい行い、徳、作法の中に育てあげ、成人して力強い年頃になったとき、彼等は走り、「馬上での槍試合 (just)¹⁵⁾」をし、レスリングをすることを教えられた。」また、15世紀の初頭に書かれた『騎士気質と戦い』¹⁶⁾と題する詩に¹⁷⁾つぎのような言葉が記されている。

「走るという運動も、いつも練習して役に立つ、
まず、戦いでは相手に襲いかかり、目の敵を追い越すのにも役立つのだ。
何故なら、よく走り、よく跳ぶものは、
敵を従え、味方の安全を保つことができるから。……」

なお、ストラッツの引用した他の物語『三人の王の息子達』¹⁷⁾に、ある騎士のことについて「彼の力を試すために、王は、馬上槍試合を催したが、競走、ポーム (pame)、射撃や鉄棒投 (castyng of the barre) では、彼に勝るものはいなかった。」と述べている。

ロンドンの市民が熱中していた「競走」や「重量投 (weight-putting)」は、必ずしもイギリス国王たちによって好まれている訳ではなかった。それは、王たちは弓術が廃れるのを恐れたからであった。そして、エドワード III 世は、とくに法令によって「重量投」を禁止した。しかし、廃止にはならなかったが、この法令は、これを守ることよりも、むしろ違反することの方に名誉が与えられたように思われる。というのは、騎士道が衰退していく時代になって、「鉄棒投」はなおも一般民衆の行うものだったからである。たしかにヘンリー VIII 世¹⁸⁾は、ある意味では、それまでの国王たちよりも自分の娯楽を選ぶことに関してすぐれていた。エドワード II 世¹⁹⁾が愛好する娯楽として「錢投げ (cross and pile)」[あるいはこれは今日、「ピッチ・アンド・トス」 ('pitch and



Harry VIII.
throwing the hammer.

toss')として知られているものであるが)を見出していたのに対して、この何度も結婚したことのある国王は、若い頃には「鉄棒投」によくふけていた。即位後も、王の日常娯楽の中に重量投、ダンス、馬上の槍試合(tilting)、跳躍(leaping)や競走が含まれていた。王の示すこの例は当然最も説得力のある結果をもっていたが、当時の作家〔ウィルソン〕が、跳躍、「競走」や「棒投げ(bar-throwing)」を含むすべての馬上や徒歩での活動的なスポーツが流行の娯楽(amusement)だといっているのも、何も驚くべきことではない。

しかしながら、つぎの時代になって徒歩によっておこなう運動について、上流階級が考慮を払わなくなりはじめた。ヘンリーⅧ世の秘書官(secretary)であったリチャード・ベイスは、貴族の子弟たちに、スポーツを一生懸命行い、「研究や学問は、身分の低い者の子弟に任すように」と忠告した。しかし、この忠告は疑いもなく、彼の読者の多くの人々に守られはしたが、「新しい学問」は、次第に上流階級の心をとらえ、教養を積んだ人の心は、荒々しい肉体の訓練をむしろ軽蔑するようになり始めた。それでもなお、ヘンリーⅧ世の治世下には、紳士たちは、乗馬の練習(equestrian exercises)と同じ位置付けでベデストリアンについてもいつも好意をもって記述していた。

サー・ウィリアム・フォレスト²²⁾は『王侯の稽古の詩』²³⁾の中で

王子たるもの、
 「馬に乗り、走り、跳び、
 石や鉄棒あるいは重錘などを力いっぱい、投げることに、
 ある程度精進すべきだ。
 そうしたって、王子や国王の品位をおとすことにはならない。」

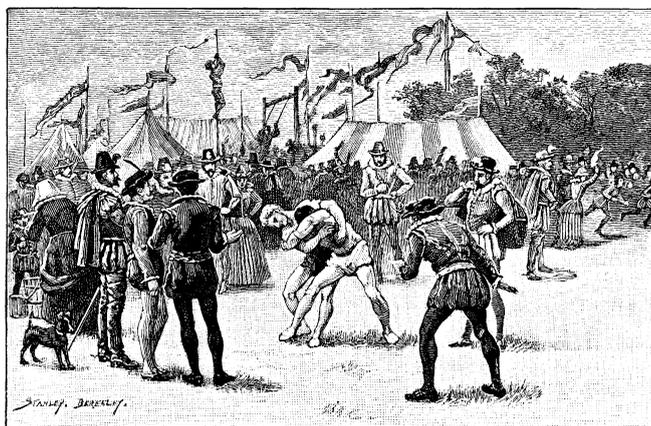
といている。

その頃の著名な騎士 (knight) トーマス・エリオット²⁴⁾卿は、その後に出た数多くの作家たちがその書から無断で借用した程の、紳士のための教育の手引書である『統治者 (為政者) 論²⁵⁾』を著わした。

色々な意味で時代の先覚者であったエリオット卿は、男児に対する不必要な「鞭打ちの刑 (flogging)」に強く反対し、競技 (athletics) と学問との適当な組合せに賛成の意見を述べている。彼は「思慮分別のある教師 (master) は、自分にとっても生徒にとっても非常に簡単に生徒を指導し、テニスや射撃をおこなわせる (play at tennis or shoot) ことができる」と述べている。彼の著書の第16章で、彼は、『紳士に必要な様々な運動の形式²⁶⁾』について「ある運動 (exercise) は健康だけでなく修養のためにも必要」等々とか「室内あるいは物陰でおこなわれる運動、例えば徒歩でいくこと (deambulations)、鉛製の重量物をもっておこなう運動、重い石または鉄の棒 (barre) を挙げたり投げたりすること、テニスや種々のそれに類似した運動に関しては、今回は省略する」と述べ、彼の読者にこの問題についてはガレン (Galen)²⁷⁾の『健康衛生の注意²⁸⁾』を研究することを奨めている。

競走や跳躍に関することについては特別であって、トーマス卿はこれらのスポーツを低級なものとして非難する人がいることを知っていたことは明らかである。彼は「走ることは良い運動であり、また立派なソラス (solace) である。」〔ソラスとは、娯楽の意味だろう。現代のある有名な運動選手が失恋の悩みを感じた時はいつも、ウサ晴らしのために徒歩旅行 (a walking tour) をした、というような意味での慰めの意味を指すものではないと考える。〕彼は、特定の事例 (*the augmentum ad hominem*) を引用して、アキレス (Achilles)²⁹⁾ やアレキサンダー (Alexander)³⁰⁾ らが有名な走者であったこと、エパミノンダス (Epaminondas)³¹⁾ が健康と娯楽 (amusement) のために毎朝食前に走ったり跳んだりしたことを示して、走ることを弁護した。彼はさらに言葉を続けて、「走ることは必ず立派な運動 (exercise) としなければならない。ローマ人の中で最も身分の高い隊長の一人が、自分の名をそれによって名付けたことでもわかる。」〔パピリウス・クルソスを指す〕と述べた。この論文の中で、彼は古典や古典的な様式を研究する一方で、非礼にも競技 (athletics) を非難する「新しい学問」の学者たちの理論に答えているように見受けられる。彼等がそのようなことを行ったということは、他の根拠からしても疑いのないところである。ロジャー・アスカム (Roger Ascham)³²⁾ は彼の偉大な著書である『弓術論 (Toxophilus)³³⁾』の中で、「競走、跳躍や輪投げ (quoiting) は、学者にとってあまりにも下品なものである。」とはっきり述べている。

しかしながら、16世紀において競走、跳躍や鉄棒投 (bar-casting) が上品なものかどうかについて、意見は二分されていたけれども、一般の民衆はこれによってほとんど影響されないで、以



Sports in time of Queen Elizabeth.

前と同様に自分たちの娯楽を続けていたことは、疑いのない事実である。『統治者(為政者)論』³⁴⁾が刊行されてからわずか数年後、われわれは、ハーリアンの写本の一つから、いつもチェスターのルーディーでおこなわれていたフットボールの大試合(the greater football match)がとても不都合をきたしてしまったので、これを競走(footrace)に変えることと決められ、靴屋が「クロス・オン・ザ・ロディッヒの市長の立会の下に」反物業者(the drapers)に「3シリング4ペンズあるいはそれ以上の値打の」フットボール用の球を贈呈する代わりに「参加したすべての人々の承認を得て、そのボールは前述したルーディーのその競技日の最も優秀なランナーに報賞として与える同価格の銀の槍(glayves)6本と交換された」ことを知ることができる。これは16世紀の習慣の珍しい点描である。年中行事の「靴屋対反物業者」のフットボールの試合に代って「チェスターの選手権における競走('Championship of Cherter' footrace)」が開催されることになったのである。

シエクスピアは疑いもなく、身分の高い人と民衆の両方の競走(running match)を何度か見たようである。彼自身のあらゆる種類の経験が彼の作品の中に再現され「内々の試合(private matches)」と「公開の競技会(public competition)」が、ともに彼によって記述されている。『ヘンリーIV世』³⁶⁾の第1部第2幕第4場でフォールスターフがポインズに競走をしようと申し出ている。³⁷⁾³⁸⁾

その太っちょの騎士は「きっと、俺は、お前と同じ位速く走れるから、1000ポンドはせしめられるだろうよ。」とっている。

『ヘンリーVI世』³⁹⁾の第3部第3幕にも、「競走(foot-racing)」の引喩がある。

「競走選手みたいにへとへとに疲れてしまった。しばらく横になって、休むことにしよう。」

しかし、われわれは、シエクスピアからほぼ1世紀前に一般民衆が競技スポーツ(athletic sports)を愛好していた証拠があるので、なお、これからの期待がある。

ストラッツは、1508年にはじめて発行されたパークレイの⁴⁰⁾『牧歌』⁴¹⁾から、つぎの数行を引用している。

羊飼は、

「俺らにだって、強く投げたり、石投げ器で投げたりできるさ。」

走ることも、組打ちしたり、棒投げだって上手にできる、
羊飼仲間の中で、俺ら程遠くまでまさかりの柄を投げるものはいないさ。
愉快的時は、うまく跳んだり、はねたりできるさ、
大人になったら王子様か王様に仕える身なんだぞ。」

といている。

ラッセルの『ギルドファツドの歴史』⁴²⁾の中にある非常に珍しい話は、16世紀のスポーツにかかわりをもっている。1597年に街の近くの畑の所有権を決定する訴訟事件で、こうした裁判によくでてくるような「土地の草分け（‘the most ancient inhabitant’）」⁴³⁾として異彩を放っている紳士のジョン・デュリークという人が、自分はその土地を50年も前から、丁度フリー・スクールの学生が「そこで走り、クリケットをやった」時から知っているといった。

16世紀のスポーツの様子)

しかし、16世紀の大衆スポーツの最も素晴らしい描写は、北国の陽気な吟遊詩人の一人であるランデル・ハウムとかハウムズとかいう男の弟の作品からしばしば引用されているところのものである。おそらくランカシャーの人々のことを綴ったものだろうが、それによると彼は詩人としてよりもスポーツマンとしてよりすぐれていたと思われる。

彼は

「大ハンマーを投げ、(throw the sledge),
溝や生垣を跳び越え、組打ちし、
クリケットをしたり (play at stool-ball), 走り
棒投げや鉄砲打ちをし、丸太遊び (loggets) や九柱戯 (nine holes) や十柱戯 (ten-pinnes) を
することで、また、走り廻ってフットボールを一生懸命やることで
すごろく遊び (ticke-tacke) や鋸で節切りし
草刈りし (saw nody, maw and ruffe)
目隠し物あて (hot cockles) や蛙跳びやカゴメカゴメ (blind man's buffe) をやることで、
酒を半ピンも飲み、一罐も片付けてしまい
いすや矢立てでチェスをし
モリスダンスを踊り、鬼ゴツコをやり、考え、
話せる限りのあらゆる冒険をやってみることで
貨幣ころがしをし、銭投げ (cross and pile) をし、
「ピリを鬼が捕える (‘beshrew him hats the last at any stile’)」遊びでがんばることで
クリスマスのかがり火を跳び越えることや
女の子をねかるみから引っぱり出すことで
雄鶏撃ちだろうと、スツール・ボウルだろうと何だろうと、
何でも点をかせいで相手を打負かし、相手がやめてくれというまで厳しく迫りかけること
で

私に挑戦することのできるものは果しているだろうか⁴⁴⁾

といっている。

上述の競技(sports)を説明するには、長い論文が必要なだろうが、これらの多くは今もなお、違った名称でよく知られているものである。「スツール・ボール」(‘stool-ball’)というのは、一人が腰掛(stool)を守り、もう一人の人がそれにボールを投げつけるといったクリケットの初歩の形式のものである。しかしながら、上記の二カ所に出てくる「スツール・ボール」のうち、一カ所はおそらく、「ストウ・ボール(stow-ball)」またはゴルフのまちがいだろう。したがって、16世紀においては、フットボールやその他の数多くの世の中に知れ渡っている娯楽(pastime)が一般的なものであったことは明らかである。われわれの目的とするものからすれば、前述の詩は競技スポーツがさまざまな形式で組織立てられはじめられたことを示すものとして大変有効なものである。1行目にハンマー投、2行目には巾跳と高跳(the Long Jump and the Hight Jump)、3行目に競走、そして4行目には先端部に鎖をつけておこなうハンマー投とは区別した「重量投(‘pitching’ or ‘putting’ the weight)」のことが述べられている。14行目には、ローマの学校の生徒達によっておこなわれたと信じられている「[ビリを鬼が捕える](‘occupet extemum scabies’)」という非常にめずらしい形式の「短距離競走(sprint-racing)」の描写がなされている。何人かの男の子が組になって一人が目標をいって急に走り出すと残りのものがその目標目指して走り出す。最後になったものがその時の取決めによって罰金を払うかやめさせられる(get a kick)。これは、スピードやスタート時における敏捷性を調べるのに最も良いテストで、今日のスプリンターが、一人が好きなきにスタートし、もう一人の人がこれにできるだけ続けていく「スタートの出し抜き(‘taking each other on at start’)」というのによく似ている。

こうしたことから、一般大衆がエリザベス時代にいつもの競技スポーツをもっていたこと、また、同時代の上流階級の人々はそれらにほとんどかかわっていなかったことは、きわめて明らかである。野外劇(pagents)、仮装行列(processions)、仮面劇(masques)はエリザベス朝の娯楽(amusement)であつたし、熊攻め(bear-baitings)や牛攻め(bull-baitings)や公開劇(dramatic exhibitous)も同様であつた。

ロバート・レインハム⁴⁵⁾のケニルウオアスのお祭り騒ぎの長い物語(long account of the revels)やニコル⁴⁷⁾の『エリザベス女王の行幸』⁴⁸⁾の物語のどこにも、われわれの知る限りのペDESTリアンの競技(pedestrian sports)に関する引喩は見当たらない。次の時代になって、間もなくこのあとわれわれが見ていくように、流行は再び変転した。しかし、不思議なことに、身分の低い階級の間での様々な形式の競技スポーツの普遍的な人気についてのわれわれの知識は、こうした娯楽(pastime)に関してはげしい反対者であつた「清教徒(Puritan)」の作者から最も多く集められることである。しかし、「清教徒」は最初、スポーツを練習している「こと(occasion)」そのものに反対したほど、スポーツそれ自体に反対していたのではなかつた。そういう「こと」があつたというのは、非常にはっきりしている。競走、跳躍、フットボールなどそれらによく似た娯楽(pastime)は普段日曜日や「教会の祭礼(Church festival)」の時におこなわれ、それがおこなわれる場所は「教会の庭(churchyard)」であつた。田舎の「市(fairs)」の最後の数日には祭典(festivity)がより大がかりに、騒々しくとりおこなわれた。「市」の方がより重要なので、まず

こちらに注目することにする。エリザベス時代においては、地方の商業活動の大部分は「市」によっておこなわれていた。馬、牛や季節のあらゆる必需品が市に持ち出された。当時発刊されたハリスンの⁴⁹⁾『英国風物誌』⁵⁰⁾には、重要な「市」の一覧表が載せられ、300から400種のこれらの集りのことが書かれている。

物の売買とスポーツを結合させるイギリス人特有の能力を知っていることからすると、売買が終わった後か、それ以前にさえも「競技会 (sporting competition)」が始まるということは驚くべきことではない。だから、「清教徒」の作者にいわせれば〔おそらく、これはいくらかの真実が含まれているだろう〕その催しが終るときには、酔っぱらいとドンチャン騒ぎの酒宴になるのである。こうした「市」は、その催しがおこなわれていた限り、疑いもなくこれと同様の形式でおこなわれていたのであるが、その「市」のスポーツの性質については、あとでさらに述べなければならないが、競走、跳躍や重量投はいつもプログラムの中にある種目であったと考えられる。しかしながら、「清教徒たち」は、これらすべてのスポーツを完全に禁止するための最良の方策をとった。ジョン・ノースブルック⁵¹⁾はすでに1577年に書物をあらわし、政府に市の監督を要求して、つぎのような丁寧な言葉で祭典のことを引用している。即ち「もしも国民の福祉の上から、これらの糞堆や汚物が除去されるのなら、これほどまで多くの怠けものの遊び人、悪漢、冒涇者などはいなくなるであろう」〔罵言は次第に強い調子で書かれているが、これらの抜萃はパウドラ流に削除 (Bowdlerised)⁵²⁾されるだろうと述べている。]

また、もう一人の清教徒作家で『悪弊の分析』⁵³⁾の著者であるスタブスも同様に強い言葉で「市」に反対を表明している。彼の一般的なスポーツに対する態度は、彼が「テニスや球ころがし (bowles) やそうしたたわいないこと」といっている事実から推測できるだろう。しかし、もし「市」が「糞堆」であったのなら、教会の献堂記念日の「前夜祭 (wakes)」⁵⁴⁾、または「祭典」および普段の日曜日のスポーツの練習は、宗教改革者たち (reformers) にとってはもっとショッキングなものであった。1570年に彼等の一人が、ラテン語ではナオゲオルギウス (Naogeorgus)⁵⁵⁾と名付けたキルヒマイヤーという外国人の作品を英訳してエリザベス女王に献上した。翻訳者のバーナビー・グージュ (Barnab Googe)⁵⁶⁾は日曜日の人々について、つぎのようにいっている。

「食事が終り、おいしさを満喫し、満腹すると
 彼等は、石投げをしたり、走りに、射撃に
 手足で軽いボールを風に向かって高くほうり投げたりする。
 また、鉄砲で自分の技を試すものあり、
 一日中レスリングをしているものあり
 フェンシング道場へ行って、試合を見物に行くものもある。」

また同じ時代に、トーマス・カートライト⁵⁷⁾は、議会への忠告のなかで、牧師も信者もともに悪いと主張している。「牧師は〔礼拝を〕出来るだけ早口に唱えて済ませてしまう。というのは、彼が礼拝を2カ所受持っているか、午後から試合 (game) があるからである。」しかし、われわれは競技スポーツを禁止しようとする「清教徒」の勢力について、もうこれ以上述べる必要はない。スポーツ史の中で清教徒の功績が正しく受け入れられるようになるだろうなどは、ほとんど

望まれないからである。疑いもなく、「清教徒たち」はまさに一時期スポーツに反対し、日曜日におけるスポーツの練習を力づくで禁止することに成功した。しかし、「ピューリタン政府」が倒れたとき、リドリー⁵⁸⁾の言葉を借りていうならば、「ピューリタン政府」の崩壊は、いまだにイギリスにおいて消されたことのないようなスポーツ熱に「火を点じた」ものであったといえる。

17世紀のスポーツの様子)

しかしながら、スチュアート朝の最初の二代の王の下では、「清教徒派」に帰依しなかった上流階級の人々も一般庶民階級の人々も共に「競技スポーツ」に対しては、衰えをみせない活気を示した。1622年に『完全なる紳士⁶⁰⁾』を著わしたピーチャムは、紳士として練習すべきスポーツの一覧表を挙げている。もちろん、最初に出てくるのは乗馬である。「国王たちは、いつも乗馬が好きだった」ので、乗馬は「偉大でしかも高貴な」スポーツとされたのである。ハンマー投とレスリングはもう少し身分の低い階級の人のおこなうスポーツで、「貴族用としてよりも野営の兵隊達にふさわしい」ものであり、「私は、エバミノダスとトルコの最後の皇帝のアクマツト以外にはレスリングによって賞讃された王侯や将軍があったことを読んだことも、聞いたこともしたことはない。」と続けて述べている。この偉人は、ハンマー投において「記録」をつくったと考えられる。「その記録は誰れもが近づきえない程のものであったので、コンスタンチノーブルに2本の大きい大理石の柱が建てられた。」今日の「記録突破者」はよくメダルを受取ることがあるが、その成績が大理石の柱に記録されていることはない。何故なら、恐らくその記録突破者が皇帝ではないからであろう。しかし、ピーチャムは競走のことを高く評価していたが、それを賞讃するのに際して、彼は前述したトーマス・エリオット卿の本から恥かしげもなく「無断盗用(plagiarism)」している。アキレスやアレキサンダーが走者だったから競走はよい、エバミノダスやアレキサンダーが朝食前に跳躍をやったから跳躍はよいといっている。しかし、彼はこれらの練習は「推せんに価すべきもの」として、自分の意見を発表している。スチュアート朝の長所や短所がどんなものであったとしても、スポーツマンたちがスチュアート朝の2人の王に負うところが大きかったということについては、疑う余地のないところである。ジェームズI世⁶²⁾は、彼自身は競技者でなく、また、フットボールには反対したとはいっても、彼の著書『バジリコン・ドロン』⁶³⁾からのつぎの抜萃には興味がある。「そしてすべての合法的かつ便宜的な不必要事項中、予は身体の運動(exercises of the body)が若い王子にとって最も推薦すべきものと考え。予は国王にとって、己の生涯の才能を働かせることが最も必要であることは認める。安逸の結果はそれが弱まり鈍くなるからである。しかし、身体の運動は確かに身体を旅行に耐えることができるようにするとともに、安逸の心を退けるために推奨すべきである。」「予がおまえにしてほしいのは、といっても適度におこなうのであって、本職にするのではないが〔おそらく、王子はアマチュアであって、「プロ」であってはならないとの意味と思われるが〕競走、跳躍、レスリング、フェンシング、ダンスや球技(playing at the catch)やテニス、弓術、ペルメル(pallemalle)その他の公平で快適な屋外競技(field games)である。」

ピーチャムも国王も、ともにハンマー投を軽視したらしい。前者はこれを嫌いだし、後者は一言もこれに触れなかった。それは、流行がヘンリーVIII世の時代以降、変化したからだろうと思われる。

気まぐれなジェームズⅠ世が走ったり、跳んだりしたことは、まず想像されないことではあるが、競技の巧みな人がこの王室の中では尊敬されたということについては、ほとんど疑う余地のないところである。1653年に発刊されたアーサー・ウイルスン⁶⁴⁾のジェームズⅠ世の伝記の中に、王にお気に入りのバッキンガム公爵⁶⁵⁾のことが記してあり、そこで「彼よりもダンスのうまい人もいなければ、彼よりも速く走る人やよく跳ぶ人もいない。」といい、この皮肉屋の編史家は「実際、彼は、これほど短期間に、かつてどんなイギリス人もやったことのなかったほど高く一市民 (private gentleman) から公爵に跳び上った (=昇進した)」と記録している。また他の編史家は、この公爵の名声を「leper」のようだといっているし、このことは一つの冗談かも知れないが、他方冗談でなく本当のことだったかも知れない。しかしながら、さらに興味あることは、「清教徒」の反対にもかかわらず、当時は、王室だけでなく大衆も競技大会 (athletic matches) を続けていたということである。1681年に発刊された『ジェームズ王・チャールズ王年代記』⁶⁷⁾には、つぎのようなことが記してある。前述の引用の中にみられるように言葉づかい (grammar) が正確であるだけでなく、場面もはっきりしていることである。この年代記の編者は「宗教改革者たちは大衆の合法下におこなわれている「娯楽 (pleasures)」や休日に異議を申し立て、ついにはすべてのスポーツや「大衆の娯楽 (public pastimes)」、跳躍、ダンス、競走など罪のない無害の競技あるいは各種のゴールや賞品 (prize) を目的とする技能 (mastery)、メイ・ポールや教会の宴 (ales) などを墮落した怠け者のやることとして、これに反対した。こうした娯楽 (pastimes) のあるものについては、いくつかの地方 (country) がすぐれていた。それで、道筋の人々を楽しませるために、王室がスコットランドへの行幸の道すがら賭を催した。その機会を利用してこれを見た大衆は、国王に対して、自分たち自身も同様に楽しむことができるように「許可してほしい」と請願した。」この「請願」の結果は、ジェームズⅠ世の1617年における有名な『スポーツの本』⁶⁸⁾の発行となり、これによって大衆は日曜日に礼拝を終えてから特定のスポーツをすることが許された。当時、この「布告 (edict)」はほとんど何ら反対も生じなかったが、チャールズⅠ世が彼の治世の8年目に再び布告したときには、それは、「清教徒派 (Puritan party)」が国王に対して加えた非難の主要な原因となった。その後間もなく、「清教徒たち」がより強力になったことは、よく知られていることである。しかし、われわれは、「クロムウエルの鉄騎兵団 (Cromwell's Ironsides)」⁶⁹⁾が国民の競技スポーツによって育てあげられたものであり、もしそうでないのなら、あれ程の「技術と持久力 (skill and endurance)」とを示すことができなかつたろうということについては、疑い以上のもっと強いものをもっている。実際、丸く刈った頭が今日において「拳闘家 (pugilist)」や「ベデストリアン」の見かけ上の目印である事実から考えて、彼等がそのような罪悪的スポーツにつながりをもっていたということは、非常に疑わしい。

「王制復古 (Restoration)⁷⁰⁾」時代のスポーツを話題にする前に、われわれは『憂鬱の分析』⁷¹⁾の書を著わしたパートンによる16世紀初頭の「大衆スポーツ (common sports)」の記述に注意を払わない訳にはいかない。パートンの書は、1660年までは発刊されなかった。しかし、その著が発刊された時は彼の死後20年経っており、しかも彼は死ぬ前の約20年をその作品の編さんに費した。もし「風評 (report)」が本当なら、彼はその有名な作品の著作中に自分自身が大変憂鬱になって、オックスフォードのフォリー・ロックの船頭の下品な言葉に聴きいる時以外には、微笑みさえ浮かべることがなかつたそうである。そして、この妙薬は彼の悲しみをしばらくの間、取り除くのに

絶対に有効であったといわれている。しかしながら、彼のこの気質 (disposition) は、「田舎のスポーツ (country sports)」を非常に鋭く観察する上で何ら障害とはならなかった。

彼は紳士階級と大衆の両方の「娯楽 (pastime)」をはっきりと指摘している。「周回乗馬 (ringing)、ボーリング、射撃、九柱戯の標あて遊び (playing the keelpins)、トロンクス、環投げ (coits)、鉄棒投 (pitching of bars)、ハーリング、レスリング、跳躍、競走、フェンシング、集合競技 (mustering)、水泳、ごみ遊び (playing with wasters)、撃剣 (foils)、フットボール、風船遊び (balowns)、やりまと競走 (running at the quintain) 等々は、田舎の人々共通の娯楽 (recreations) である。大きい馬に乗ること、馬を走らせて吊した環をとる競技 (rming at rings)、馬上槍試合 (tilts) や馬上試合 (tournament)、競馬や野雁狩 (wild-goose chases) はより上流階級の人びとの楽しみ (disports) であり、それ自身はよいものである。けれども、このために数多くの紳士が自分の運を乗り外したのである。」彼は続けて、これらの田舎の娯楽 (recreations) は、五月祭大会 (May-games)、祭礼 (feasts)、祭り (fairs) や献堂記念日の前夜祭 (wakes) のときにおこなわれるものだといっている。こうした引用は、すでに述べてきたものとともに、17世紀初期の競技スポーツの普遍的な流行の様子を確実に示すものである。

この「競技の祭典 (athletic feats)」は、もしも、当時の記録が信用をなくしてしまう契機となった1797年の『ジェントルマンズ・マガジン』⁷³⁾ 誌の中にあるつぎのような一片の情報を信頼するのなら、「ピューリタン政府」の時代になってからでも実施されていたと考えられる。しかしながら、このすべての資料があまりにも「お粗末 (absurd)」なので、もっと他の理由で、歴史的な出来事の中にその位置を見出す値打もなくなっていると聞かされても、何ら驚くことはない。〔『週間情報』⁷⁴⁾ の147号は〕「クロイドンのある牛肉屋」が1653年12月1日にセント・アルバンスからロンドンまでの20マイル (=32.2 km) を少くとも1時間30分で走り、最後の4マイル (=6.4 km) はあまりにも安定していたので、彼はまるで冥想にふけているかのようなようだった。また、彼は努力して事をなし就げたとは思わず、むしろレースとしてよりもレクリエーションと考えてほしいと願っていた。」と述べている。今日シンダー製の道路での20マイルの最高記録として知られているのは、1時間51分54秒⁷⁵⁾である。

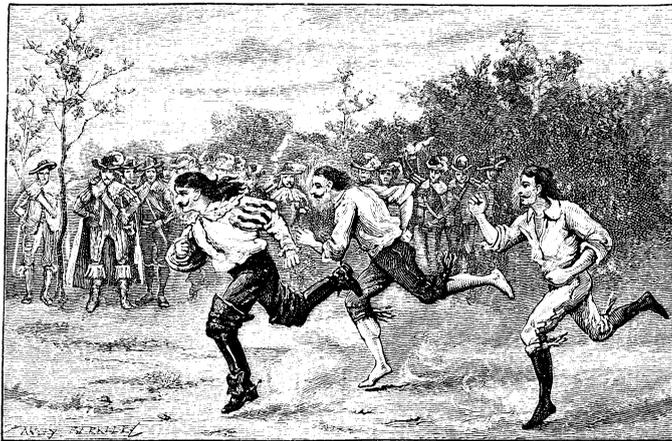
「王制復古」以後のスポーツの様子)

「王制復古」とともに、「王制復古」へと連がっていったところのピューリタニズムへの反感が、競技への熱狂を大爆発させた。メイ・ポール⁷⁶⁾が再び建てられただけでなく、どんな生徒でも知っているように、フットボールもまた、街路や野原にもち出されてきた。「ベデストリアン (pedestrian)」の「試合 (contest)」をおこなおうとの決定もしばしば行われたし、人々の人気を引きつけもした。実際、チャールズⅡ世⁷⁷⁾の治世時代から現在まで、完全で、連続的な「ベデストリアニズム」の歴史が、得られることができるようになったといってもほとんど間違いない。人びとが、スポーツを再び行うことができるようになって、大変ホットしたので、足の悪い人々 (cripples) も競走をした。『ロイヤル・プロテスタント』の第2篇の中で、われわれは、ニューマーケット・ヒースにおける王の面前で、2人の足の悪い人同志の間での競走があったことを知ることができる。「午後3時頃、それぞれが木の脚をつけた二人の足の悪い人の中で競走があった。二人は、公平なスタートを切った。(この事実は、ベデストリアンの間でも歴史に残すだけの値打があ

ると、当時でさえ思われていたものである。)そして、2人は、素晴らしい勢いで進んでいった。それは、見物人の間で賞讃と笑いをまき起した。しかし、2人のうちの背の高い方が2~3ヤードの差で勝った。」しかしながら、これよりも、もっと興味深い「試合 (contest)」がたくさんあった。ピープス⁷⁸⁾は、これらのことについて、度々言及している。この日記作家は、1660年8月10日のところに、つぎのように記入している。「馬車に乗って、ムーア氏とグリードと一緒に、ハイド・パークへいくと、アイルランド人と、かつて、私の主人のクレイプールス卿のフットマン (footman) であったクリューとの間の素晴らしい競走 (foot-race) を見た。」

1633年7月30日のところには、競走についてのもっと意味深いもう一つの記入がある。「きょうのこの町の人々の話題は、バンステッド・ダウンズでのリッチモンド公のフットマンのリーと、有名なランナーのタイル職人との間で行われる大きな競走以外の何もなかった。王やヨーク公、それにすべての人々には、ほとんどタイル職人の方に、3対1か4対1で賭けていたにもかかわらずリーは、タイル職人に勝った。」そうした「賭金を失った」ことを聞いたり、プロフェッショナルのスポーツマン達の悪だくみのことを知れば、そして、この場合には、このタイル職人が、勝つことよりも負けることの方が「金儲け」になるのだということを知っていたら、誰もその考え方を押え付けることはできなかったらう。

しかしながら、当時、「プロの選手達 (professional)」だけが、走るのに忙しかったのではなく、「アマチュア (amateur) 達」もまた、大変活躍していた。私の主人のキャッスルハーベンとアラン (私の主人のオルモンドの息子) の二人の貴族が、ヘンリー V 世の功績に競争を挑んだ。そして、「彼等2人は、走って行って、セント・ジェームズ・パークで太った雄鹿を殺した。」これは、賭金を目的としたものであり、王の面前でおこなわれた。しかしながら、この2人だけが競技 (athletic) 好きの貴族ではなかった。ピープス⁷⁹⁾は、他に、モンマス公⁸⁰⁾について語っている。「彼は、いつも、棒高跳や走巾跳、山登りなどをやっている。私が、今迄に知っている中で最も陽気で跳ぶことの好きな伊達男である。」マコーレー⁸¹⁾は、彼の『歴史』の第2章の中で、モンマス公⁸²⁾について、同じような描写をしている。「彼は、レスリングをしたり、6尺棒 (quarter-staff) を使っ



Monmouth in boots v. Soldiers in stockings.

たりなど、いつでも田園のスポーツにも参加していたし、短靴をはいた人に、自分は長靴をはいて走って、競走に勝ったりした。」

私は、当時には、立派な公爵を負かすのは「行儀がよくない(not 'good form')」ことだったと考えたいと思う。何故なら、「大長靴(jack-boots)」をはいた人が、「名選手」にふさわしい服装をしてきている人に勝てるなどというのは、信じられないからである。われわれは、こんな方法で、宮廷人たちが王とテニスをしていたのだということをピーブスの日記から知っている。そして、この年老いた日記作家は、⁸³⁾チャールズが、⁸⁴⁾有名な選手(player)でなかっただけでなく、宮廷人たちの行為もまた「ひどいもの('beastlie')」であったと云っている。このような、長靴の重さによってハンディキャップをつけるという雑なやり方は、長い間、一般的であったらしい。

多くの読者諸君は、やせた作家と太った出版屋がパンチ酒一杯を賭けて「ハンフリー・クリンカー」で行なった競走を想い出されるだろう。前者は、「ハンディキャップ」として、自分の相手から乗馬用の長靴を借りた。そして接戦の末、その出版屋が(ハダシで走って)「息切れした」隙に、無一文の作家は、長靴を足に履いたまま、破れたボロ靴を置き忘れて、逃げ去った。そして、もうこれ以上何も見られなかった。モンマス公は、とも角も、こんな悲劇をあえて犯さなかった。

確かに、この時代には、「プロのペDESTリアン(professional class of pedestrians)」としての一般的な数の増加は、「ペDESTリアン」や「ランニング・フットマン(running footman)」を雇っていた当時の上流社会の紳士(gentleman)達の一般的な習慣によって促された。紳士達は、都会と田舎に家を同時に持つ様になり始め、当時のひどい道路を旅するようになった時には、「ランニング・フットマン」は、家族用の大型馬車よりも早く旅することが出来たし、馬に乗っている人よりも、一日のうちに、長い距離行動できた。

賭けが大好きだった時代において、試合(match)が、紳士お抱えの「フットマン」同志で、紳士たちによっておこなわれていたようだったということは、別に驚くべきことではない。当時の「フットマン」は、そうした目的のために雇われた専門家としての「ペDESTリアン」であった。とに角、強いランナーは、「フットマン」としての場所を簡単に見付けるだろうし、徒歩で郵便物を届ける仕事とか、家族馬車の前を走って旅の手筈を整える仕事によって、主人は、「フットマン」のためにおこなうような試合に間に合うように「フットマン」を、元気一杯の状態にしておいたようであった。18世紀の終りになって良い道路が、「ランニング・フットマン」の役割を終りにし始め、鉄道網の充実がその没落を完成していった。一般的に云って、現在の「ペDESTリアン」からは、もともと、彼の祖先が、素晴らしい「ペDESTリアン」としての業績をあげたことを暗示するようなものは、わずかしが残っていない。

有名な「Old Q」氏について語られている面白い話が、次のことを示している。強いランナーは、自分の走る力が、ある金持ちの家族にどうすれば就職するのに役立てられるのかを自覚させてきた。「Old Q」氏は、いつも、ある種の競争試験の形式で、自分の「フットマン」を雇っていた。欠員を埋めるすべての就職希望者は皆、「フットマン」の服を着せられて、手紙を運ぶためのいつもの棒(staff)を持たされ、家の前を走って、「その走りっぷり」を示さなければならなかった。あるひどく暑い日、「Old Q」氏は、バルコニーでゆったり休んでいた。すると、就職希望者が非常にうまく走ったので、貴族は、彼をながめる楽しみのために暑さの中で彼を走ら

せ続けた。ついに、貴族は、バルコニーから、希望者に叫んだ。「お前は、私の役に立つだろう。」「わかった」とその男は云った。この時すでに、このような主人には仕えないと決心していたこの男は、(金のレースのユニフォームを指さして)「これらの物も、私の役に立つだろう。」といっ、すぐに、これらのものを身に着けたまま走り去った。彼は、追跡を免れる程優秀なランナーであった。

このことから、われわれは、「ランニング・フットマン」が誕生して以来、主人に仕えているもの、仕えていないものもいたが、「プロのランナー (professional runner)」たちが切れ目なくいた事を見出すのである。

彼等のうちの最も有名な者同志の最も有名な試合 (match) の話は、その当時の記録から集めることができる。一方では、更に頻繁に「アマチュア」たちのことを聞いている。それは、賭をしてタイム・レースをおこなったり、自分に賭けて「お互いに競走したり (run against each other)」した紳士のことを聞いている。『ラッテル・ペーパー』⁸⁵⁾によれば、1690年に、「故リンジー伯爵の息子のペリイグリン・パーチ氏が、賭けをして、セント・ジェームズ・パークの木蔭道を、1時間以内に11周走った」らしい。同じ記録の1699年のところには、いくつかの面白い書き込みがある。それによると、ケント州の強い男のウィリアム・ジョイスのことが載っている。彼は、綱引きで荷馬車を引っぱり込み、20cwt⁸⁶⁾の重さを持ち挙げる (lift) ことができた。彼は、ドーシット・ガーデンの劇場で演技をした。その入場料は、ボックス席10シリング、立見席5シリングでそのことから考えられることは、可成りの金額を集めたり手に入れたりした筈である。もう一つ、注目すべき書き込みがある。それは、ある「スポーツ・マン」が5時間以内に「事前宣言した (swearing)」ことで9ポンド4シリングの罰金を払わされた。これは「事前宣言」の方法としての「新記録」であると考えられる。

18世紀のスポーツの様子)

1720年にオックスフォードの在學生であったエラスマス・フィリップス卿の日記の中に、二人の「ペDESTリアン」の間で行われた競走の、最も生き生きとした描写がある。彼等は、もちろん「ランニング・フットマン」であった。(『ノーツ・アンド・クエリーズ』⁸⁷⁾について通信員から集めた) 抜萃には、つぎのようなことが述べられている。「ウッドストックへ馬で行った。ベアーという店で食事をした。(2シリング6ペンスであった。) 夕方になって、ウッドストック・パークに馬で乗り出した。そこで、グローヴ(ウォートン公のランニングフットマン)とフィリップ(ディストン氏の)との間の競走を見た。私と同名人 [=フィリップスのこと] が4マイル (=6.44 km) の周回コースを18分で走り、そのレースに勝って、彼の主人のために1000ポンドを得た。グローヴと彼は、その賭金目指してスタートしたのであった。この際には、ものすごい人だかりがあった。」勿論、ここで述べられているタイムは、とんでもないものである。というのは、その距離が、4マイル完全になかったのか、あるいは、計算上間違った状態で記載されたのだと考えられる。いずれにしても、ウッドストックのような、「ひどく遠い」ところに人びとが集まったということは、人びとがレースに示した興味を証明するものとして注目すべきことである。

しかし、「ペDESTリアン主義」のスポーツやその代表的人物の歴史的な描写に取りかかる前に、ここでは、一寸脇道にそれて、国民が田舎の「縁日やお祭り (fair and festival)」で、今なお、

走ること、跳ぶこと、投げることに耽っている様子を示すのがよいと思う。「清教徒」たちは、一般に、日曜日の「競技会(athletic meeting)」を止めさせることにしていた。しかし、お祭りとその「前夜祭(fair and wake⁸⁸)」におけるスポーツは、それらの祭りがあるのと同じ位の長期間続いていた。一方、その多くは、実際、どんな田舎の町においてでも、今もなお変わらずに続いている年中行事としての競技会によって、とって代られるまで、何らかの形で残っていた。パートンの時代にまで、昔の田舎のスポーツが衰えのない力をもっておこなわれていたのを見てきた。その田舎のスポーツは、街でも田舎でも、「反逆の時代(Rebellion⁹⁰)」を生き伸びてきた。ストウが⁹¹1690年に出版した『ロンドン調査』の中で、フィッツ・スチーフアの引用に続いて、彼が指摘した「競技(exercise)」は「現在まで」続いてきていると述べている。

1720年にストウの調査とは別に、本を出版したストライプは、彼の時代に「ロンドンの貧民(lower class)」たちがやったことの一つとして「棒投げ(pitching the bar)」のことを指摘している。一方、後の作家のマイトランドは、また、1739年に出版した『ロンドンの歴史』の中で、競走や跳躍(leaping)の試合(match)が、下層階級の楽しみの中に含まれていることを述べている。『スペクテーター』紙の中の一つの論文が、ストライプやマイトランド等々と同様に、同じような話を載せている。それは18世紀の初頭迄は、「競技娯楽(athletic pastimes)」が下層階級のスポーツであると考えられていた。『スペクテーター』の第2巻161号の中にアディソンは、イギリス西部の田舎の通信員から聞いたものであるとして、一つの文章を書いている。「田舎の献堂記念祝日の前夜祭(Country Wake)は、イギリスのほとんどの国教会への奉納(Dedication of our Church)という形で行なわれている。」実際には、アディソンは、パースで見た祭りのことを描いたことがわかっている。彼は、「草地が多く、老若男女でおおわれていた」と述べている。「すべての人は、自分の得意とする競技(exercise)によって自分の存在をあらわそうと、晴れ着を着て、いくつかのグループに分かれていた。」

あるところでは、「棍棒競技者(cudgel-player)」の「競技場(ring)」があり、他方では、「フットボールの試合(match)」、又他方では、「ボクシングの競技場(ring)」があった。これらの「試合(competition)」の勝者への賞品は帽子であった。「それは、いつでも、それを手に入れた人によって、家の最も目立つところに掲げられた。そして、いつも紋章(coat-of-arms)よりももっと名誉あるものとしてみなされていた。」「威張った振りをしている」若者は、そうすることに、それ相応の「わけ」があったようだった。というのは、「彼とその祖先が、自分の客間に非常に多くの帽子を持っていたので、その客間は、雑貨屋のようであった」からである。若い娘もまた、その遊び(diversion)に加わっていたらしい。というのは、農場主(farmer)の息子が、何を眺めているのかとひとに問われているのには「恋人のベティー・ウェルチが、棒投げ(pitch the bar)をするのを見ているのだ。」ということであった。そのような「競走(running match)」もまた、前夜祭には普通のことであったというようなことが、その手紙についての『スペクテーター』の注釈からも、明らかである。彼は、「競走(competition)」に勝つ娘は、普通、同時に恋人をも手に入れそうであることについて、「足の速い娘っ子は、仕事衣(smock)をもらおうと同時に、夫をも手に入れるのが速いのも、ごくありふれたことである。」と述べている。また、他の著者が云っているように、仕事衣や女性用のシャツがこれら「田舎のスポーツ(rustic sports)」の女性のためのいつもの賞品であり、帽子が男性のための賞品であった。しかし、その当時には、「賞品

目あて」にやってくる男女といっても、その賞品をお金に換えようとの誘惑は持っていなかった。それは、ちょうど、現在、銀やメッキ製のトロフィーを手に入れようとする人が、そう思っていないのと同様である。

しかしながら、パースは、西部イギリスにおける「陸上競技大会 (athletic meeting)」にとって、とくに、注目すべき主要な場所ではなかったが、ストラッツは、1801年に、西部の田舎について、2つの重要な年中行事のことを書いている。その1つは、グロースターシャーの「コッツウォルド・ヒル」のことでありもう1つは、コーンウォールの、ポドミンの近くの「ホルカパー・ムーア」についてである。最初のところについて、シュトラッツは、「とても多くの群衆が、いつもきている。ウースターの田舎の荘園穀物置場の代理人であったロバート・ドーバーは、40年間もの間これらの楽しみ (pastime) の主催者であった。それらは、強さと行動力のさまざまなわざを伴うレスリング・棍棒競技、巾跳、棒投げ、鎚投げ (throwing the sledge)、槍投げ (tossing the pike) から成り立っていた。

ドーバー大尉は、ジェームズ I 世⁹⁷⁾から、これらの競技 (sports) を行なう許可を受けていて、国王が、以前に着ていたその衣裳を身につけて、しかも、それは、国王よりも、もっと表情や風采に威厳を伴って、その祭典 (celebration) に現われたのであった。」と述べている。彼はまた、続けて、「自分は、コッツウォルドの試合 (game) が、ドーバー大尉によって、発見され、はじめて確立されたというのではない。田舎では、もっと意味深い起源をもっているように思われる。」と述べている。それから、ストラッツは、同じような性格の試合 (meeting) が、ポドミンの近くでも行なわれていたことを、1750年に出版したコーンウォールとヒースの記述から引用して、示している。ヒースは、「ここで行われたスポーツや娯楽は、チャールズ II 世⁹⁸⁾がシシリへの道すがら、ここに立ち寄ったとき非常に好まれたので王は、陽気な仲間の一員となった。こうしたお祭り (carnival) を行う習慣は、サクソン時代 (5~6世紀) にまで遡るといわれる。」とも述べている。

祭やその前夜祭と競技スポーツ (athletic sports) との結びつきの関係が、今日まで、うまく続けられているかどうかという疑問などは全くない。実際には、旅行や商売のための施設が改良されるに従って、祭りは重要性を失っていき、同時に、これらの人気のある「陸上競技会 (athletic meeting)」が消え去るとともに、その栄光もまた、それらとともに消えていった。しかし都市における「ベデストリアン主義」の成長と繁栄に並行して、ついに最近の「大競技運動 (great athletic movement)」が田舎を覆い尽くして、その年中行事を改革し回復するに至るまで、これらの「田舎のスポーツ (rustic sports)」は、存在しつづけたのであった。『スペクテーター』から引用した論文は、18世紀初期のパースにおいておこなわれたその年中行事の集りについての非常に詳細な話を載せている。それらの性格は、疑いもなく、その数や重要性の上から減少していったけれどもそれが本質的には変らなかつたのも事実である。

19世紀初頭のスポーツの様子

ホーンの『エブリデー・ブック』⁹⁹⁾の第1巻の¹⁰⁰⁾ところでは、「古物収集家のカーター氏」からの手紙として、18世紀の終り頃、ピカデリーの近くの野原で、大きな「5月祭」(Mayfair) が行われたと述べている。住宅が、ずっと以前にすでにメイフェアの野原を被い尽してしまって、今

日では、上流階級のいる地域 (fashionable quarter) となり、むかし庶民のスポーツがおこなわれていた名残りを示すための名前〔メイフェアという〕だけが今もなお残っている。そこでは、手品師の見せ物、ボクサーの小屋、他方では、棍棒競技の小屋、それに火喰いのリング等々があった。目撃者であるカーター氏は、「屋外でのスポーツは、ロバの競走、帽子を賭けてのニラメッコ、下着を賞品にした競走 (running) など、他のよく似たいろいろな娯楽 (pastime) があった。」と述べている。ホーンの本の中に、もう一人の通信員が、北部地方のアピングハムの祭り (fair) についての同じ様な話を載せている。ダンスが終ると、スポーツが、村長の前で始った。競技 (contest) の中には、「帽子、ハンカチ、女性用シャツを賞品とした競走 (foot-racing) があった。競走 (race) がいくつか終り、賞品が渡されると、人々は楽しい催しの中でも最後で、最も愉快なものへと向っていった。それは即ち、夕方のダンスと酒である。最後には、“その夜は全く上気嫌で” 立ち去って行くのであった。さらに同じ本の中に、ウィルトシャーの「ハンガーフォードのお祭り騒ぎ (revel)」についての詳しい記述が載っている。

この「祭り (festival)」での主な「楽しみ (amusement)」は、もちろん、棍棒競技であったと「トム・ブラウン」¹⁰¹⁾ という人が、そのことをうまく書いている。しかしながら、そのほかに、1826年には、この祭り (festival) には、つぎのようなプログラムが含まれていた。

- (1) 仕事着を賭けての女の子の競走 (running)
- (2) ベーコンを賭けての、ぬるぬるした棒登り
- (3) 嗅ぎタバコを賭けての老婦人の紅茶飲み
- (4) 馬の首輪から顔を出してのニラメッコ
- (5) 紅茶 1 ポンドを賭けての、老婦人同志の競走 (race)
- (6) 豚のシッポに石鹸をぬってのつかまえっこ
- (7) チーズを賭けて、袋に飛び込む競技
- (8) ロバの競走 (race)

その年の始めには、「ペハードのお祭り騒ぎ」と呼ばれているもう一つの祭りがあった。1819年5月24日の『リーディング・マーキュリー紙』に、スポーツの広告が載っていて、棍棒競技で、頭を割った人に、18ペンスを、自分の頭を割られた人には、1 シリング (=12ペンス) を渡すと、約束している。

『エブリデー・ブック』の中の最も面白い通信の一つは、北部について述べているものである。1826年のところでこの作者は、「北部の最も大きな町ではほとんど、献堂記念祝日の前夜祭は消滅しかかっているのを残念に思っている。もっとも、北部・中部のほとんどすべての教区村 (parochial village) では、今もなお、年々おこなわれてはいるが……。」と述べている。

しかし、その作者は、(われわれは、ベDESTリアン主義の偉大な故郷であるところには、期待をしているのだが) シェフィールドにおいては、いまもなお、その「前夜祭」が続けられているといっている。「リトル・シェフィールドとブロードレーンにおいて、年中行事のお祭り (festival) への熱狂は、ロバの競走、帽子を賭けての競走 (foot-race) [男性の]、シミーズを賭けての競走 [女性の] やニラメッコの試合 (match) によって高められる。」とも述べている。

おそらく、競技者 (athlete) に対するホーンの最も面白い抜き書きは、ノホークの「ネクトンの組合 (Necton Guild)」についてのところであろう。それは、疑いもなく、最初のイギリスのア

スレチック・クラブであったと考える。1817年、ノホークにおけるネクトンの「石工組合長 (Major Mason)」は、地方の「前夜祭」を、定期的な陸上競技会 (athletic meeting) とする様に決心した。彼は、いろいろな余興のための露店やスタンドあるいは屋台を許さなかった。行事は、「ギルドの親方」が先頭に立つ行進によって始められ、メイ・ボールのまわりに輪をつくった。

そのあとで、スポーツが始った。それは、つぎのようなものであった。

- (1) レスリング
- (2) 競走 (foot-race)
- (3) 二輪馬車競走 (match)
- (4) 袋に飛び込む競技
- (5) 〔目隠ししての〕手押車のレース
- (6) 糸巻競争 (spinning match)
- (7) 口笛競争
- (8) ニラメッコ競争
- (9) 巾跳の試合 (jumping match)

賞金の授与式のあと、その性質については述べられていないが、ダンスが始まり、小役人やギルドの他の役員によって、厳しい秩序と礼儀正しさが保たれていた。この年中行事の試合 (meeting) は、1819年から始ったのだが、1826年でもなお、行なわれていた。しかし、今日では、その歴史の痕跡は、もはや見出すことはできない。ネクトン・ギルドの試合 (meeting) には、「多くの立派な上流の人々」が出席した。それは、広く認められているものとして存在しているようであった。

ネクトンの石工組合長は、たしかに、自分のギルドの協会 (institution) をつくったことで、「競技の名誉の殿堂 (the temple of athletic fame)」の中に一つの場所を与えられるのに値する。

これらの「前夜祭」は、イングランドだけに局限されているものではない。ホーンはまた、ベルファストのイースター集会についても述べている。〔それは、今日、特別な陸上競技会 (athletic meeting) のひとつとして存在しているものであるが〕そこでの「競走や跳躍の試合 (running and jumping match)」は、当時の主なプログラムであり、カントリー・ダウンのポーターフェリーには、もう一つの試合 (meeting) がある。そこでの、これらの楽しみ (amusement) には、「キス・ゲーム」(kissing game) によって、バラエティーがつけられている。「男達は既婚者でも独身者でも、お構いなく、女性にキスをした。」しかしながら、男たちに対しては、ぶしつけであるとの非難がかからないように、「キスすることは、もちろん、恥かし気もなく……、当り前のこととしてやる」のだということが考えられなければならなかった。その著者は、「これらの習慣の起源についての伝説は、何も語ってくれてはいない。」とまじめに論評している。

しかしながら、われわれは、「祭り (fair)」や、そこで行なわれる「田舎の陸上競技の試合 (rustic athletic gathering)」について、十分なことを述べてきている。それらは疑いもなく、19世紀の間に、次第に少なくなっていく。しかし、その陸上競技の試合の大部分は、現在の近代的、組織的なルールのもとでおこなわれる「正規の陸上競技会 (athletic meeting)」にとって替えられてはいるものの、そのいくつかは、今日まで生き残ってきていることもまた事実である。

しかしながら、私は、1885年現在、ある小さなコーニッシュの町でその「前夜祭」を目撃した

ことがある。そこでは、「回転木馬 (roundabout)」等々のほかに、夕方には、「陸上競技会 (athletic meeting)」があった。それらの種目 (event) には、競走 (running)・跳躍 (jumping)・一輪車レース〔目隠ししての〕・袋競走 (sack race) やぬるぬるした棒登りなどがあり、賞品は、帽子か衣類 (garment)、または、食べたり、飲んだりする性質のものであった。この調査から、年中行事の試合 (annual meeting) が、「誰もが思い出せないほど、古いもの」であることがわかった。

それは、町がそこにつくられたのと同じ位古いものであるということについて、ほとんど疑いはない。というのは、すべての「前夜祭」は、もともと、教会がそこにおかれたことについての、「お祭り (festival)」であったからである。

これまでのところ、われわれは、現在に至るまでの、田舎のスポーツの歴史を辿ってきている。というのは、これらの試合 (meeting) が、イギリス全土を通して、「競技精神 (athletic spirit)」を、生き生きとさせ続けていることは、疑いのないことであるからである。その一つ一つは、アスレチック・クラブの核として役立ったし、現代の競技スポーツ (athletic sports) の復活が訪れたとき、一つの中心を創り上げるのに役立った。

われわれは、また、ある点においては、事柄を先取りせざるを得なかったのである。というのは、18世紀と19世紀の初頭を通じて、田舎の「前夜祭」と、「プロ選手によるペDESTリアン主義 (professional pedestorianism)」との二つの潮流があったからである。後者は、時を経るにつれて、丁度、プロ・ボクシング〔懸賞つきのボクシング試合〕が、そうなったのと同じように、正当な、スポーツの一分野として位置づけられはじめたのである。

われわれは、「王制復古」以来、「プロ選手によるペDESTリアン主義」にも、連続した歴史があるのだということを、すでに見てきた。しかし、「愉快な大王 (Merry Monach)」〔=チャールズⅡ世のこと〕の時代や18世紀において、ともに、「あらゆる種類の賭事 (wagerning and betting)」のために、アマチュアの間には試合 (match) がなくなってしまったのだと考えてはならない。

『バージニアン』¹⁰²⁾の中で、自分が描いていた時代をよく知っていると同時に、競技を目的とする人間の肉体の能力ついてかなりの理解をもっていたサッカー¹⁰³⁾は、賭けをして巾跳 (jump for wager) の試合をしたハリー・ワリントンと、マーチ・ラグレン卿の試合 (match) について語っている。

そのヴァージニア人〔ワリントンのこと〕は、21フィート3インチ〔=6 m 59 cm〕を跳んで、18フィート6インチ〔=5 m 73 cm〕を跳ぶことのできたその貴族〔ラグレン卿〕を破って、賭けに勝った。そして、ハリーは、更に1フィート余計に跳ぶことのできる別の人 (G. ワシントン大佐) がいたことを知っている、ヴァージニアへ宛てた手紙の中に書きつづっている。

サッカーの記述の正確さは、19世紀の他の作家たちよりもはるかに正確であるといえる。『夫婦』¹⁰⁴⁾という作品を書いたウィルキー・コリンズ¹⁰⁵⁾も、そのうちの一人であるが、競技の「わざ」についての知識を敢えて持とうとしないで作品を書いている。

サッカー以外の作家達は、時にはある妙な大失敗をしているけれども、そのような競技の「わざ」を、偶然導入してくるだけの作家たちにとっては、そのような間違いはおそらく、軽い罪としか考えていないのだろう。

『湖上の貴婦人』¹⁰⁶⁾の(第5篇23連)の中で、スコットは、ダグラス〔登場人物の名前〕に、「重量投 (weight putting)」の奇妙な「わざ」を行わせている。

「たくましい郷士 (yeoman) たちは
 巨大な棒を、空中に投げるために腕をふるった。
 それぞれが、最大の努力をしたあと
 ダグラスは、地中深く沈んだ岩を、
 ちぎり根こそぎ、引きちぎり、高々と持ち上げてその破片を、空中に投げた。
 いちばん遠いしるしよりも、1 ルード¹⁰⁸⁾遠くまで……」

サッカーが『レベッカとロウィーナ』¹⁰⁹⁾の作品の中で、「獅子心王 (Cœur de Lion)」〔= heart of lion¹¹⁰⁾〕が、「鉄砲 (culverin) を、まるで葦草のように、投げた。鉄砲は、300ヤード (=270 m) 離れたユーゴーのバンヨン (Hugo de Bunyon) の足の上に落ちた。バンヨンは、自分のテントの入口のところで煙草を喫っていたが、鉄砲が当って、数日後まで、まともに歩けなかった。」と書いているが、これを書いているとき、スコットの作品を思い出していたのではないかと思われる。

『湖上の貴婦人』(3篇12連)の中に、跳躍 (jumping) の方法について、もう一つの、考えられないようなわざについての内容が載っている。それは

「触先が、銀色の浜辺から
 まだ、3 尋 (=約 5.5 m) も離れているときに
 血気盛んな使者は
 軽々と陸地へと跳んだ。」

「立巾跳」(standing long jump) で18フィート (=5 m 50) も跳ぶというのは、誰も破れそうにない一つの「記録」である。〔今日の陸上競技大会 (athletic meeting) で、知られている最高の記録は、12フィート $2\frac{1}{8}$ インチ (=3 m 71 cm) である。〕そのような誤まったりリストは、どこまでも拡がっていきそうなので、ここではもう一つの例だけを、挙げておこうと思う。

『ジョフリー・ハムリン』¹¹¹⁾の中で、ヘンリー・キングスリー¹¹²⁾は、「筋肉たくましいキリスト教 ('muscular Christian')」の副牧師 (curate) が、4マイルを20分で走り、そして垣根の扉をとび越し、自分の帽子を脱いで、婦人に挨拶をし、自分のタイムを計るために自分のポケットから時計を出した。そして、見たところ少しも息切れしていなかったため、彼は、「慈善競技会 (benefit of athletic)」についての話しをはじめるのである。この副牧師が、植民地の教会の高僧になったのは、驚くべきことではない。彼はその名誉を受けるのに値したのである。

競技の「わざ」についての成績を示す18世紀の歴史は、賭けについて、おかしな話だけでなく、立派な話も沢山ある。本物の競技成績の大部分は、これらの「プロのペDESTリアン」のものであり、アマチュア達は、賭けの話の中に時々登場してくるだけである。そして、それは、時としてとんでもない賭けに登場するだけである。

ラッテルの『日記』¹¹³⁾には、64歳のあるドイツ人が「ハイド・パーク」で、6日間に、300マイル(=約483 km)歩く競技をして、「時間内に、1マイル超過して」達成した、との話を載せている。1780年には、『ジェントルマンズ・マガジン』〔雑誌名〕に、75歳の老人が、クイーン・スクエアのまわりの4マイル1/2(=7.24 km)を、58分で走ったと書いている。

8年後に、若い紳士が、乗馬靴と拍車をつけたジョッキーを背負って、背中に誰も背負っていない(ブロックという名前の)ある年寄りの太った人を相手に、競走(run a match)を仕掛けた。

賭けが、とんでもないものであればある程、大衆の間で引き起こされる興奮は、より高まっていった。ある魚の行商人が、ハイド・パーク・コーナーから、プレントフォードまでの7マイル(=11.26 km)を、頭の上に56ポンド(=25.4 kg)の魚をのせて、賭けをして45分間で走ったと報告されている。

もう一人の男は、セント・ジャイルズの野原につくられた舞台のまわりを、馬車用の車輪を1時間に8マイル(=12.88 km)も転がした。

もう一つの変った「試合(match)」は、「竹馬に乗った人(on stilt)」と、「徒歩の人(on foot)」との競走のことである。前者は、120ヤード(=約110 m)の中で、20ヤード前からのスタートを許されていた。もっと驚くべきことは、竹馬に乗った人が、この試合(match)に勝ったことである。



Man on stilts
v. man running.

18～19世紀の競走の様子)

実際に行われた、本当に興味深い試合 (match) の、いくつかの実例は、いくらでも挙げる事ができるだろう。そこでいわれているタイムの多くは、本当に途方もないものであり、先に述べてきた、ウッドストック・パークでの4マイル・レース (=6.44 km) において、出されたと考えられているタイムと同じ位、途方もないものである。あるイタリア人は、ハイド・パークから、ウインザーまでを、1時間45分で走ったといわれている。他の人は、ビショップス・ゲートから、コチェスターまでの往復 [102マイル (=164 km)] を12時間で歩いたのである!

1750年には、エイブラムとテンプルという二人の有名な「ペDESTリアン」が、4マイル試合 (match) で、一方に100ギニー (=2100シリング=105ポンド) を賭けて走り、前者が勝った。

1762年には、もう一人の男が、30ギニーの賭金を目当てに、キングスランド・ロードを通過して、7マイルの距離を、1時間05分で歩いた。

これらの多くの試合 (match) は [これらは、最も人気のあった試合であったが]、持久力や長距離のタイムレースとして成り立っていた。1762年には、ジョン・ヘイグ氏は、100マイル (=161 km) を、23時間15分で歩いた。強い人 (a good man) が、どの程度の速さで歩けるのかについて、一般の人々はほとんど少しのことしか知らなかったことが、実際に行われていた多くの試合 (match) の様子からも明らかである。

ある事務員は、例えば、4マイルを、50分以内で歩くことによって、50ギニーの賭金を獲得した。この「賭け (bet)」は、1766年に行われ、その4年後に、もう一人の人が、チャータハウス・ウォールからショーデイツ・チャーチの門までの道路で、1マイル (=1609 m) を4分間で走って、賭金を獲得したと聞いている。1777年には、その所要時間については正確だと思われるヨークシャーの成績の話も聞いている。それは、「ペDESTリアンの」ヨセフ・ヘッドレイが、ネーベスマイヤーで、2マイル (=3.22 km) を9分45秒で走ったということである。

「競技のコース (racecourse)」、すなわち公の道路は、この当時、本物の「ペDESTリアン」の「試合 (match)」の通常の「競技場所 (arena)」であつたらしい。1780年には、ペンリスのある「ペDESTリアン」は、ニューキャッスルのレースコースで、50マイル (=80.5 km) を、13時間で歩いた。1785年には、もう一人の「ペDESTリアン」のウルフィットは、公の道路を通過して、朝6時から夕方6時までの間、6日間たて続けに、1日40マイル (=64.4 km) ずつを歩いた。そのすぐ後で、ヨークと名のる人が、エッグガムのレースコースで、4マイルを24分半で走った。1787年には、ニューゲート・マーケットからきたウォールポールという肉屋が、ポウプという名の有名なペDESTリアンと一緒に、シティ・ロードを通過して、1マイルを走った。その人は、4分30秒のタイムで走り、相手を打ち負かした。もし、このタイムが本当だとすると、素晴らしい成績なのだが……。1788年には、エバンスと名のる「ペDESTリアン」とタイム神父の2人が、ニューマーケットで試合をした。この試合 (race) に関して、ものすごく大きな興奮をまきおこした。エバンスには、10マイル (=16.1 km) を、1時間以内で、帰ってくるということが、賭けられていたからである。

エバンスは、この距離を、55分18秒で走ったと信じられている。そうすることによって、彼に賭けてくれた人たちに、10,000ポンドかその程度の金を儲けさせたのであった。

同じ年、もう一人の、ワイルドという「ペDESTリアン」は、ナッツファッドのレース・コー

スで、4マイルを21分15秒で走った。

次の年、注目すべき持久力の「わざ」が見かけられた。それは、ある労働者のサヴァガーという男が、ヘリファッドとラドロウの道路で、2マイルの丘を、毎日3度も越えて、6日間で、404マイル(=650 km)も歩き続けた。この「わざ」のために契約された報酬のすべては、合計10ギニーの金額であった。だから、彼は、おそらく、ロウアルやその他の「ペDESTリアン」たちが、何年か前に、彼等の「規則のはっきりしない」長距離の試合(contest)によって、何千ギニーもの利益を、手に入れた時代に生きていたかっただろう。

1791年には、ある貴族のアマチュアが、道路に出ているのを聞いている。パジット卿、パリモ一卿、グロブナー大尉やラム伯爵らが、総賭金100ギニーでケンジントン・ガーデンを横切る競走をした(run a race)。見物人は、多かったようである。そして、接戦の末、パジット卿がラム伯爵を破った。グロブナー大尉は、3位であった。1793年には、もう1人のアマチュアの、コスモウ・ゴードン伯大佐が、アクスブリッチの道路で、5マイル(=8 km)を1時間で歩くという賭けを引き受けたとき、どうも、彼の友だちに、金を儲けさせたようである。しかしながら、彼は彼自身、真のアマチュアであった。というのは、もしも彼が賭けに勝てば、その賭金を、兵隊や水兵の未亡人や子ども達の救済の基金に捧げるという約束をしていたからである。この立派な大佐は、タイバーンからアーリンまで、当然、出来そうなことであったけれども、5マイルを1時間以内で、簡単に歩いた。

その当時、「ペDESTリアン」の「わざ」について掻立てられた最大の興味は、「長距離競走(competition)」から起っていた。その「長距離競走」においては、スピードや技術よりも、むしろ、持久力が示されたのであった。

この方面における最も有名な「競技者(athlete)」は、[ともかくも、パークレー・アラダイス大尉の出現までは]法学院(New Inn)の弁護士事務員のフォスター・ポウエル氏であった。彼は、この世紀の25年間、長距離走のチャンピオンであったと、皆からいわれている。彼は、1734年に、リーズの近くの、ホースファースで生れた。そして、彼が、パースへの道路で、最初の10マイルを1時間以内で通過し、50マイルを7時間で走る、といった最初の「わざ」を見せたのは、30歳を過ぎてからであった。

この後、彼は、外国へ出て行って、スイスとフランスで「ペDESTリアン」としての、彼の「わざ」を示した。そして、彼は、大きな賭金を求めて、ロンドンからヨークまでの402マイル(=646.8 km)を、5日と18時間で歩いて往復するといった「わざ」をやったのは、1773年になってからである。

1777年に、彼は、ロンドンからカンタベリーまで、[112マイル(=180.2 km)]を、24時間以内で、往復した。何千人もの観客は、彼が道に出る(走る)のを眺め、彼の帰還を喜んで迎えた。

11年後には、彼は55歳で、カンタベリーのスミス氏を相手に1マイル競走をした(run a mile match)。スミス氏は、この年上の「ペDESTリアン」にとってはあまりにも速い人であったが、ポウエルは、スミス氏を打ち破った。55歳の時、ポウエルは、ロンドンとヨークの往復を、再び5日と18時間で走ったし、2年後には同じ距離を5日と15時間15分で走って自分自身の「レコード」を更新した。

このような偉大な選手が、ものすごい興味を掻き立てたことは、不思議なことではない。彼が

記録した「わざ」の数々は、〔その記録が、本物であることには、疑う余地がないようであるが、〕それ自体で、一冊の本を一杯にすることだろう。1823年に百科辞典を編集した人は、「それは、途方もないことであるが、人々が、彼を一目見たいと希望したので、彼は、小さな円をえがいて、彼の足並みを示すために12日間アストリイの円形劇場と契約をした。」と、書いている。

しかしながら、彼は、ヨークへの最も厳しい旅からくる影響によって回復することなく、このあとすぐに死んでしまった。そして、彼はセント・ポール寺院の庭の東隅に埋葬された。その当時の人々の話から想像すると、彼の体つきは、中肉中背であったように思われる。

おそらく、フォスター・ポウエルの業績がスポーツとしての「ペDESTリアン主義」の人気を広めるのに大いに役立ったと思う。というのは、一人の偉大な選手が、それほど優れていない模倣者を沢山引き出すのだということ、われわれはいつも知っているからである。

ポウエルの時代に、ペDESTリアン主義が、再び「ブーム」になった。そして、このスポーツの衰えかけた人気、パークレー・アラダイスの業績によって、再び、復活させられた。

その後者の「ペDESTリアン」〔アラダイスのこと〕の「わざ」は、実際、それ以前には知られていなかった書物 ペDESTリアン主義についての書物 を、生み出したのであった。1813年に、アラダイス〔彼は、いつも、パークレーの名前で走っていた〕と同郷の人が、一つの書物『ペDESTリアニズム。別名、前世紀と今世紀の間の有名なペDESTリアンの業績についての物語。パークレー大尉の公式・非公式な試合（match）についての詳細な物語と、トレーニング上の論文も、備えられてある¹¹⁴⁾』を書き上げた。

1813年に、ウォルター・トム氏によって、アバディーンで出版されたこの作品から、われわれは前述してきた18世紀の「わざ」の多くを、引き出しているのである。

トム氏は、トレーニングについての助言に対して、当時の一般的な流行に従ったが、それについて、彼を非難することはできない。彼が推せんした食事は、牛肉・羊肉・古いパン・強いビールと硫酸ソーダーであった。練習は、いつも朝、歩いて汗をかくことであった。

彼は、「患者は、着物を着たまま歩き、羽根ぶとんの間で、寝ることによって汗をかき、薬によって、いつも、からだをきれいにしておかなければならない」と、述べている。魚・野菜・チーズ・バター・卵は、絶対禁止されるべきだし、時々、吐剤の使用が推められている。

現代の陸上競技者（modern athletes）は、違った方法でトレーニングを受けていることに、感謝すべきであろう。

トム氏は、元来、パークレー大尉のことを述べようとしていたのであるが、陸上競技の名声のために、大尉よりも、もっと有名な先輩たちについての、序章を追加した方がよいだろうと、考えたのである。

彼は、この序章を4項目に分けている。

- (1) 数日連続の試合（match）
- (2) 一日の試合
- (3) 1時間か数時間で終るもので、よい呼吸法と速い敏捷性が求められるもの
- (4) 数秒か、数分で終るもので、それは、すごい速さ（swiftness）が示される

このような大雑把な分け方をすれば、距離や時間に関するかなりの数の驚くべき話を一括してしまうことになってしまうだけである。だが、こうした欠点があるにもかかわらず、この書物は、

本当に、興味深いものがある。

トム氏によって『スポーティング・マガジン』に記録された、長距離走の成績のリストを載せれば、退屈になるだけである。その記録の中で最善のものは、フォスター・ポウエルのものであった。しかし、それらの選手たちが、社会のあらゆる階層の出身者であり、即ち、軍隊の将校・地方の紳士(country gentleman)・農場経営者(farmer)・労働者(labour)・肉屋 その多くが、他に仕事をもたない、「プロのペDESTリアン」であったことは、注目に値するであろう。

もっと驚くべきいくつかの事実として、つぎのようなものが挙げられる。一即ち、ブラーマンのレヴィ・ホワイトヘッドは、ブラーマン・ムーアで4マイル(=6.44 km)を19分で、ミルトンの紳士の(a private gentleman)ハズルダン氏は、カンタベリーの道路で10マイル(=16.1 km)を「楽々と」53分で走ったということである。この後者の記録は、1809年に出されたものであった。1808年2月ジャミン・ストリートの紳士のウォーリス氏は、それぞれのスタートを1分間隔で「二つのスタートをする」というやり方で、2マイル(=3.22 km)を9分で走った。

これらのタイムについては、疑いをもって見なければならぬのは当然のことであるが、¹¹⁵⁾トムの書物は、1813年に彼の書物が出版される以前の20年間にも、競技スポーツ(athletic sports)の人気があったことを、生き生きと描写している。ハウ、スミス、 그레이の3人の「ペDESTリアンたち」は、20マイル(=32.2 km)や10マイル(=16.1 km)競走(competite)を頻りにやったようである。1793年には、パレットとウィルクマンの二人のペDESTリアンがカーザル・ムーアで10マイル競走をして、前者が57分で勝った。1805年には、ウォーリン中尉と芸術家のピンダル氏がアクスブリッジの道路で7マイル(=11.26 km)競走をして、芸術家の方が1/4マイルだけ勝った。タイムは35分であった。1805年、ジェームズ・ファラルは、200ギニーの賭金ほしさに、目標タイムに挑戦して、ナッツフォードのレコードコースの4マイル(=6.44 km)を20分57秒で走った。当時の最も有名な「ペDESTリアン」の一人であつてランカシャーのアブラハム・ウッドは、ヨークシャーの19歳の若者のジョージフ・ビールに4マイル競走で破れた。彼はチャンピオンを21分18秒で打ち破った。ビールはまた、ランカシャーのボルトンのもう一人の「ペDESTリアン」のアイザック・ヘムズワースとヨークのレースコースで2マイル(=3.22 km)試合(match)をして、9分48秒で勝ったと信じられている。

1809年、デーン大尉とデービス氏はベイズウォーターの野原で1マイル試合(match)をして、大尉は4分56秒で「約2長身」の差で勝った。F・ベンチンク卿とエドワード・ハーバード侯の二人の別のアマチュア達もまた、1804年に100ギニーを賭けて1マイルを走り、後者が簡単に勝った。そして、すぐそのあとこの貴族はベーコンのコースを越えるもう一つの試合(match)をおこない、メリッシュ氏に打ち負けされた。1805年、ハーバード氏は、F・ボウクレア卿と100ヤード(=91.44 m)の「短距離試合(match)」を試みた。後者は、2ヤード(=1.82 m)勝った。この勝者は、同じ距離でブランド侯と相まみえ、「後者の紳士が50歩走るまでに全く息切れてしまった」ので、簡単に勝った。

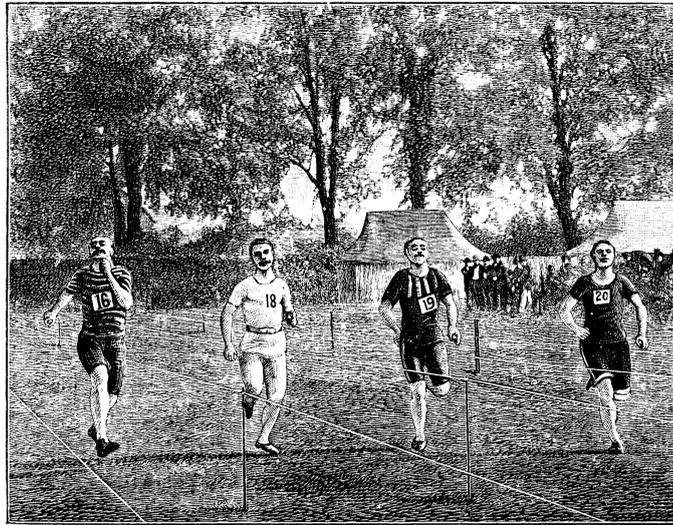
これらの2つの試合(match)は、ともにロード・クリケット・グラウンドでおこなわれたものである。トムは当時の著名なアマチュアとして、ダグラス大尉、ランバート氏、ハンキー中尉、エイキン大尉、フェアマン中尉、エイガー大尉の名前をあげている。実際、アマチュアの競技者たち(the amateur pedestrians)は主として軍隊の士官であったと考えられる。このことは、しば

しば繰返されている話として、われわれに伝えられてきていることなのだが、1812年頃には、サンドラストで「正規の定期陸上競技大会 (a regular anual athletic meeting)」があり、それが後に中断されてしまったことによって、われわれは、そのことについての十分な確証を得ることはできない。

トムは、お気に入りの英雄であるランカシャーのミルドローのパークレー大尉に勝るとも劣らないアブラハム・ウッドが当時の最大級のランナーであったという考えを述べている。彼の報告された最高記録は、ナーバスマイヤーの4マイル (=6.44 km) で以前ウッドに勝ったことのあるジョン・ブラウンに相対したときに出したヨークでの同じ距離の20分21秒であった。しかしながら、ウッドは、1809年に有名なナッツファッドのコースでの1/4マイルを56秒でノッチンガムのシプリーに勝ったことからしても、短距離でも素晴らしい選手であったと考えられる。短距離走 (sprinting) は当時、長距離の競走 (longer distances) ほど人気はなかったようである。しかし、その時代にいた短距離走者たちは、もしも計時された記録が正確だったとするなら、驚くべき人たちに違いない。ブライトンの牧童のカーリーは、1805年に「ペDESTリアン」のグリーンリーに競走 (run a match) を挑み「ケンシントン公園の門までリードして歩いて」いたが、グリーンリーは12秒5で先行して勝った。翌年、グリーンリーはハンプトン・コート・グリーンズの120ヤード (=約110 m) で、当時としては「平凡な記録 ('level time')」で相手に勝った。しかしながら、カーリーは軍人で別の「ペDESTリアン」のクックに短距離走で勝ったが、クックは50ギニーを賭けて紳士のウイリアムス氏に1.5ヤード勝った。だが、1808年には有名なランカシャーの牧童のスキューボールはハクニーで140ヤード (=128 m) を12秒で走った！これは恐らく、当時の作家達が、出そうなタイムと出そうにもないタイムを見分けることができなかつた見本のように思われる。

ところで、パークレー・アラダイス大尉はニューマーケットで1000マイル (=1609 km) を1000時間で「歩くわざ」をやったのけたことによってよく知られている人である。この成績は、疑いもなくそれ以後にも、もっと優れた人が常にいたにもかかわらず、当時の人々を驚かせた。しかも彼は、すばらしい「万能選手 (all-round performer)」でもあった。彼は、1779年の生れで、こうした競技スポーツをこよなく愛し、わずか15歳のときクロイドンで1時間に6マイル (=9.65 km) 歩いて、ある賭人に勝った。21歳の時、彼は90マイル (=144.8 km) を21時間半で歩き、5000ギニー (=525ポンド) の懸った試合 (match) をやって、数千人の見物人の賞賛の中でわけなくこれに勝った。彼はその後間もなく、1/4マイルを56秒で走り、ウォード氏を破った。1806年に彼は再びロード・クリケット・グラントで近衛兵のグールバーン氏に同じ距離 (1/4マイル) の試合の挑戦を受けたが、1分12秒で簡単に勝った。彼はまた、アマチュア達とともに2つの1マイルレースに5分07秒と4分50秒で勝った。そして、1000マイルを1000時間で「歩くわざ」をやったのけた1796年から1808年頃、彼が当時としては最も著名なランナーであった。いや、そればかりではなく、トムの言葉を借りれば、「彼はいつも名誉と正直さという原則に忠実であって、個人として人々と交際するときにも、故郷の寺院 (the shrine of his country) での言動に責任をもつ公人として、いつも他人の権利を尊重し、イギリス国法に心から忠実であることを証明した人」であった。

しかしながら、確かに彼は、彼が紳士たちにとって人気のある「娯楽 (pastime)」としての競



Sprinting of to-day.

技スポーツをうまくやったからこそ、「近代陸上競技」からは感謝を受ける値打が十分あるはずである。今日でもよく知られているように、当時は「プロフェッショナル」と「アマチュア」の間には区別がなかった。紳士たちはお互いに試合をしたり (made matches), 紳士たちを喜ばせてくれるような「ペDESTリアンたち」とも試合をした。そして、われわれは偉大なパークレーがアブラハム・ウッドと一緒に「長距離の競走 (a contest of endurance)」に参加して、ウッドを「走り疲れ」させたことも知っている。だが、19世紀の前半の25年間を通じて、パークレーの始めた事柄は多くの成功をなしとげた後輩たちによって続けられていった。実際、1825年になるまでは、数多くのアマチュアたちはニューマーケットとかアクスブリッジの道路やロード・クリケット・グラウンドで試合をしていた。そして、これらの競走 (contests) の中で、非常に多くの興味が見物人達によって示されたので、アマチュア達のための「陸上競技大会の方式 (the system of athletic meeting)」が実際よりも半世紀前におこなわれなかったのは不思議なことである。もっとも、すでに見てきたように19世紀の初期にサンドラストでは「正規の大会 (meeting)」がおこなわれた形跡がある。しかしながら1825年頃から後には、アマチュア達の間での「競走 (foot race)」の人気は衰えたようであり、われわれは「試合 (match)」に関係していた数人の紳士たちのことを知っているにすぎない。にもかかわらず、われわれは、今世紀のはじめのアマチュア時代のことを信じているし、その頃いた人は今もなお、生存しておられる。現在のトルマッシュ卿¹¹⁶⁾は、いくつかの「短距離競走 (sprint races)」を行なったあとで、友達から、イギリス中のどんな男を相手にしても100ヤード走には勝つだろうというように賭けられていた。この挑戦はマクナマラ氏の代理人によって受け入れられた。「試合 (match)」はいつもの「会場 (venue)」の「ロード・クリケット・グラウンド」で実現し、トルマッシュ卿は再び勝者となってみせた。ついこの間亡くなられた故ホーレイショ・ロス氏もまた「長距離競歩の選手 (a walker of long-distanc matches)」として、若い頃に名を成していた人である。

しかしながら、この頃、フィールドにはごくわずかなアマチュアのみが活躍していたのに過ぎ

なかったけれども、「プロのペDESTリアン主義」は、19世紀を通じて確実に増え続けた。また、われわれは競技場のチャンピオンとして同じような形式で互に「選手権」に挑み、戦いとうとうとしている有名な「短距離や長距離の走者たち (short-distance and long-distance runners)」の規則正しい系統性があることもよく知っている。

われわれが今述べようとしている時代は、ほとんど現代の競技のことである。この著書におけるわれわれの仕事は、アマチュアのための「娯楽 (pastime)」としての競技スポーツのことであって、「プロのペDESTリアン」たちの仕事のことについてはない。われわれが19世紀の「ペDESTリアン主義」の歴史をここに示すことは困難である。というのは、『スポーティング・マガジン』や『ベルズ・ライフ』の本の中に載っている以外には、こうした巾広い資料が少ないからである。しかしながら、こうしたいくつかの有名な成績は、途切れることなく進歩する競技能力を示すものとして注意を引いている。1825年、ジェームス・メトカーフ (選手権者) はナースマイヤーで1000ギニーを賭けての1マイル競走で、J・ホールタン (前選手権者) に20ヤード (=18.3 m) のハンディキャップを与えたが、選手権者の方が4分30秒で勝った。しかし、われわれがこのタイムに近づいたことを知るのは、このあと15~20年後のことであり、このタイムは1849年になってはじめて、1マイルを4分27秒で走ったバーミンガムのW・マシューズによって破られたことを知るのである。1825年と1838年か39年あるいはその頃の間には、すべての距離にわたって「ペDESTリアンの試合 (match)」が、ごく有り触れたものになっていたけれども、「ペDESTリアン主義」は、もう少し後になって人気が出るようになったほど人気のあるスポーツではなかった。われわれは、『ベルズ・ライフ』のコラムの中に、『競技場 ('The Ring)』という見出しをつけて編集された新聞の終りの一部に、「ペDESTリアンの競技会予定日 (pedestrian fixture)」の記事を数年にわたって見る習慣がついていたのを知っている。後になって〔1838年〕『ベルズ・ライフ』は、ペDESTリアン主義に対して、それ自体にも見出しをつけ始めたし、いまも毎週20ないし30種目 (events) のリストを載せている。1840年から1850年の間には、「ペDESTリアン主義」は、もう一つの「ブーム」を巻き起した。スポーツが人気を持てばいつも、アマチュアたちは試合を再開し、「アマチュア同志」や「ペDESTリアンと一緒に試合 (make matches)」を行い始めた。競技のやり方の違いからくる珍しい実例として、これらの「競走 (contests)」で、アマチュアたちが自分の本名を名乗ることについてのさまざまなやり方をしていたことがわかる。

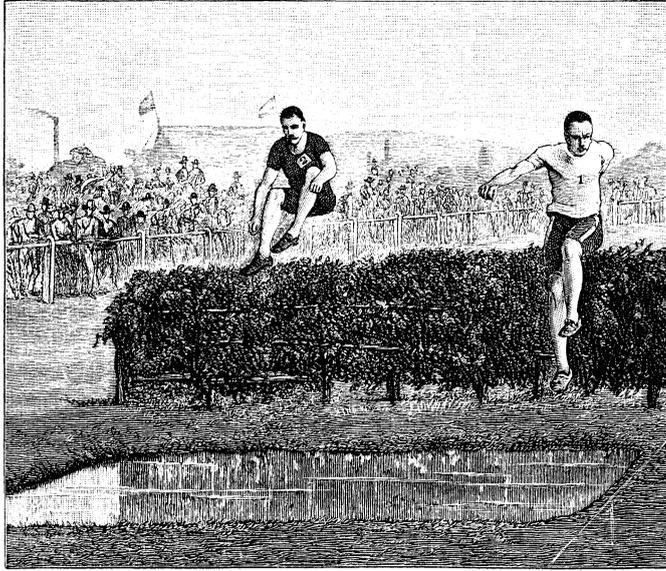
1838年の『ベルズ・ライフ』には、「ある理由」によって本名を隠したバーミンガムの6人の医科大学の学生によって発起された「クロスカントリー障害物競走 (a cross-country steeplechase)」があったことを載せている。そこには、「スプライトリー (元気者)」、「ラスティック (田舎者)」、「チット・チャット (おしゃべり)」、「ネバースウェット (汗しらず)」、「ヴァルカン (火の神)」、「ザ・スパウター (質屋)」といった匿名だったと記されている。審判員たち (umpires) が1マイル・コースを選定し、波乱に満ちたレースの後に「ザ・スパウター」が勝ち「ネバースウェット」は第2着であった。5年後には、アマチュアたちも再び本名を名乗って走ったし、民衆は彼等の試合を拍手喝采をしながら見物していた。ハーグレイブス大尉とフェンタン氏が1843年に走った「1マイルの試合 (a mile match)」では、非常に多くの観衆を引きつけた。ほとんど全盛時代を誇っていた「プロのペDESTリアン」のことがわかるのは、その後それ程遅

くない時期であった。「ビリー」・ジャクソン(アメリカの鹿), J・デービス(足の悪い鶏)とトム・マックスフィールド(北の星)は, ものすごい人の群と「大熱狂」の中で「マックスフィールドのマイル」として今も有名なスラウの道路で「1マイル試合をした。(run a mile match)」。この頃、『ベルズ・ライフ』は, 予定されている50に近い試合(match)の開催日のリストを毎週載せていたし, 制度としてのペDESTリアン主義は既成の事実となっていた。1850年の「リバープール, マンチェスター, ニューキャッスル, その他の大都会におけるスポーツ人口の大部分」のことについては, エントリーのレースコースでの4マイル競走(=6.44 km)で「トミー」・ヘイズが「ジョニー」・テトローに勝ったことからもうかがうことができる。また, ジョージ・フロスト(別名, 雌羊〔the Suffolk Stag〕)が例のコペンハーゲン・グラウンドでの10マイル(=16.1 km)レースで選手権ベルトを獲得した1852年には, 試合(contest)の石版画が印刷され, 無数に売れた。これほどまでに「ペDESTリアン主義」の人気が高まってきたので, それが「アマチュアの活動(the amateur movement)」を動き出させるもう一つの原動力となったとしても, 何ら不思議なことではなかった。

「ボランティア活動」という言葉が, 当時のイギリス中での「競技精神の爆発(the outburst of athletic spirit)」について説明する言葉としてよく使われている。街の中で起きてきたこうした衝動は疑いもなく, 現代の「商業主義的で専門主義的な生活(commercial and professional life)」の重圧の産物であることは, 恐らくありそうで, しかも哲学的説明となるものだと考える。労働時間が長くなればなるほど, 社会の間には「激しい運動(violent exercise)」が必要となり, その必要性が数々の「陸上競技の試合(athletic games)」の人気を引き出し, その大会は現在も広くおこなわれている。しかしながら「競技活動(athletic movement)」の由来がどんなものであろうとも, 初期のアマチュア達の競技スポーツがプロの「ペDESTリアン達」の成績から示唆を受けたことや, 人並みはずれたおびただしい数のペDESTリアンの能力があった時には, いつもアマチュア達がプロの真似をし始めたことだけは疑いのないところである。われわれは1845年から1852年にかけての間にペDESTリアン主義に示された多くの大衆の興味があったことを見てきたし, 初期の「正規の陸上競技大会(the first regular athletic meeting)」がこの頃始められたのだと聞かされても何ら驚くことはない。1849年に, 正規の組織立った陸上競技大会が「ウーリッチの陸軍士官学校(the Royal Military Academy)」で行なわれた。それは, その大会が中止になる1853年まで続けられた。1850年には, 「オックスフォードのエクゼーター校で試合(meeting)」が発足した。これは今日まで引き続き「定期的」に続けられている。この時の選手だったある人の手によって今日われわれに伝えられてきている以下の様な大会が始まった頃の様子についての話は, 「近代陸上競技」に対する興味を沸かさぬ訳にはいかない。そして, 恐らく唯一残された見本としてのプログラムには, これらの1ページ1ページの中にここに再掲しても構わないほど興味を沸かすものが残っている。

「オックスフォードのエクゼーター校は, 陸上競技大会(an athletic gathering)を発足させた最初の学校(institution)の一つである。これを目撃した人や, 最初にスポーツをおこなったことをいつまでもここに残しておこうとした人や, 創設者であり最初の選手(performer)だった紳士たちの記憶から主として集められた「はなし(narative)」には非常に興味深いものがある。

「1850年のことであった。カレッヂ障害物競走(俗に「カレッヂ・グラインド」〔“College Grind”〕



Steeplechase—Water-jump.

と呼ばれている)の終わったあとの夕方のことであった。ある4・5人の気の合った仲間が、彼等のいつもの慣わし通りに、R・F・ボウルズ(ミルトン・ヒルの有名な走者の大地主(squire)のジョン・ボウルズの兄)の「部屋」での「食事」の後で、ワインをチビリチビリとやっていた。主人のそばには、ジェイムズ・エイトキン、ジョージ・ラスル、マーカス・サウスワールとハリファックス・ワイアットがいた。話題はその日の出来事のことになって、オックスフォードの貸馬で田園を「通り抜け」た不満足な様子についてのことになった。ワイアットの馬が脚で立つ代りに、頭で道の上に立ったので、彼は「そんな動物(¹¹⁷brute)に乗る位だったら」「自分の足で田舎を2マイル走りたい位だ」といった。「よし、やろうじゃないか」と残りの者はいった。「それでは、カレッヂの障害物競技(Collage foot grind)をやろう」といって、皆はそれに賛成した。

「ボウルズは、競走(racing)に秘かな愛着をいだいていて 実際彼は、パークシャーの平原の練習場(training ground)の近くで生れ育っているのに 平地での競走(race)を一、二度やってみようと提案したのであった。これにも仲間は賛成した。規定が起草され、賭レース(stakes)に名前がつけられ、役員(officials)が任命され、「競技スポーツ」としての最初の試合(meeting)が始められた。

「初日の午後には、参加料が1ポンドで、違約金が10シリングの24の障害物(24 jumps)のある2マイルのクロスカントリー『障害(“chase”)』がおこなわれた。さらに翌日の午後には、エクゼター校のメンバーだけが参加できるようになっている平地の1/4マイル走、300ヤード走(=274 m)、100ヤード走、10ヤード毎におかれたハードルを跳び越す140ヤード障害走(=128 m)、1マイルやその他『ヘトヘトになった馬』(¹¹⁸“beaten horses”)用の賭レースがあった。『エクゼター秋季大会』の幹事はR・F・ボウルズとジョン・プロートンで、秘書はH・C・グランビル、コースの書記はE・ランケンで、オックスフォードの有名なスポーツ用品店のランドル氏が審判員(Judge)として招待された。ランドル氏は今もなお80歳のお年ながら存命中であるがヘンレ

ーやパトニーあるいはロードなど大学内の試合(University contest)があるときにはいつも出席しておられる。

「賭試合のリストの載っている大会(meeting)の注意事項は、いつもの守衛所の黒板に掲示されていた。10以下の賭試合がないときには多くの参加者は障害物競走で24人がスタートをすることになっている。

「選手たち(competitors)のなかには、ジェイムズ・エイキン、J・スコット、ジョージ・ラスル、ジョン・プロートン、R・F・ボウルズ、D・ジャイルズ、H・J・チャールズ、H・ワイアット、ジェイムズ・ウッドハウス、C・J・パーカー、P・ウィルソン、M・サウスワール、H・C・グランビル、H・コリンズ、E・ナイトのほか9名の人が出た。

「その賭率は エイキンに対して2対1、チャールズには2対1、ジャイルズには8対1、ワイアットには9対1、パーカーには10対1、スコットには10対1、プロートンには12対1、ウッドハウスには15対1であった。

「コースは、セブン・ブリッジの道路に近いピンゼーの沼地の農場の平坦地(on a flat)が選ばれた。そこは非常に湿ったところで、『水があふれている』ような野原で小川の土手も高く、もしも全部がそうでなかったとしても、多くの選手たちがたしかに水びたしになってしまうような柔かい踏切点であった。24人は、皆が整ったよいランニング用の『服装』をしてはいなかったが、出発点に集ってきた。しかし、24人の元気で活発な若者たちはクリケット用の靴をはき、フラネルのパンツをはいて、あるものは良いコンディションで、またあるものは非常にひどい状況で、しかし皆は『必死』の覚悟をしていた。多くの人々が馬に乗ったり、歩いたりしてこの珍しいものを見にやってきた。(というのは、古代アテネの時代と同じように現代でも人々は常に『何か新しいこと』を待ち望んでいたからだといえる)そして、この場合には、これらの興奮ぶりから判断すると、多くの励ましの言葉が選手たちに送られたようであるし、この珍事には高い評価が下された。

「24名の出発者の約半数がスタート地点を離れるとすぐ、彼等はちょうど数100ヤードだけ走るとなような走り方をしたので、彼等はたちまち、まいってしまっただけで、アイケンは次第に皆の中から抜けて出て、家からある野原のところまでは先頭を切っていたが、次第に追ってきたワイアットとスコットがついに肩を並べた。堅い地面に着地したワイアットは一番速く走り、比較的簡単に勝者となった。2位にはエイキンがようやくのことで入った。

「今日のランニングの概念からいえば、タイムは疑いもなく遅いものだったようである。しかし、グラウンドはぬかるんでおり、柵(fence)も大きく、すべての選手達はズブぬれになったフラネルのパンツが両脚にからみついて、大きなハンディキャップを背負わされていた。

「ポートの草原でおこなわれた起伏のある芝生でのフラットレースについては、全種目にわたる勝者の確実な記録は保存されていない。ハードル・レースはE・ナイトが勝ち、R・F・ボウルズは第2位であった。100ヤード走はワイアットが勝った。彼は、他の短距離レース(shorter race)にも1~2回勝った。しかし、マイル・レースでは、彼は時代遅れの狩猟用のベルトを腰に巻いて数ポンドもある砲弾を運ばなければならなかったため、エイキンに次いで2位となった。今日のハンディキャッパーの皆さんも、このことをよく知っておけばよいと思う。

「こうしたことが、競技スポーツの初期の頃の歴史なのである。そこで、当初スポーツを奨励し、実行した人々についてもう一言、二言述べておこう。というのは、現在の競技者に、すぐ前



Ready to start.

の世代の人々が皆『役目だけしか実行しない人 (“unprofitable servants”¹¹⁹⁾』であったとは考えてほしくないからである。

「マーカス・サウスワル, R・F・ボウルズ, ジョージ・ラスル(スワローフィールドの男爵で今日のジョージ・ラスル卿)たちはおそらく選手としてよりも支援者 (patron) であったようである。しかし, サウスワルは上手な馬術家であり, しかも練習をしなくても1時間に6マイル (= 9.66 km) 歩くことができた。しかし彼は, アメリカに旅行したとき, 落馬して死んだ。ボウルズとラスルはともにボートを漕いだり, クリケットを行ったり, ランニングも少しは行った。おそらく彼等は, スポーツの初版本を出版するのに最も活躍した人たちだと考えられる。ジェームズ・エイキンの名前に関しては, マイル・レースに勝ったり, 2マイルで2位になったりしたことからして, より多くの役割を果たしたという記録がある。クリケット選手として彼はイトンの正選手として試合をしたし, オックスフォードでは, 1848年, 1849年, 1850年にケンブリッジと対した時, 大学〔オックスフォード〕の正選手として試合をした。1850年にはチームの主将を務めた。1849年には, 彼はパトニーでの対ケンブリッジ戦での漕手 (oarsman) として, ボートも漕いだ。彼は1850年に, ヘンレーでの「グランド・アンド・スチュワード (the Grand and Stewards)」のためにボートを漕いだオックスフォードのエイトとフォアのメンバーの一人であったし, 1851年にヘンレーでケンブリッジに勝ったときのオックスフォードのエイトとしても漕いだ。また現在のチティー判事と一緒に出て「ゴブレット杯大会 (The Goblets)」に勝った。彼は大学〔オックスフォード大学〕を卒業すると間もなく聖職についたので, 彼は大いにボートを漕ぎ, クリケットを行いつける時間もなければ, 機会もなかった。しかし彼は今, 大学時代ボートの第5席を漕いだ時のように彼の教区 (parish)¹²⁰⁾で激務をこなし, 真面目に働いている。そして, 現在でもなお, ローンテニスに関しては, ハーフアッドシャ のチョリーウッズの牧師 (vicar) やジェームズ・エイキン師にかなう若者はいないと, もっぱら噂されている

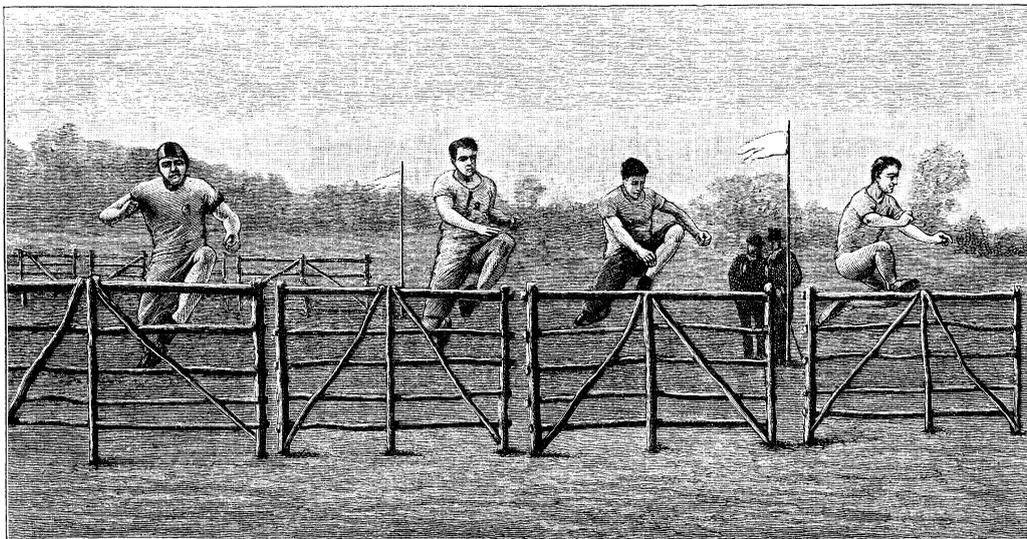
「もう一人の選手のハリファックス・ワイアットは, 『デュークス・カントリー』 いうまで

もなく彼が心から気に入っている土地の で生れた。彼の若い頃 I・Z が狩場においても、テントを張った芝生においてもバドミントンでプレーをしていた時に、バドミントン・ライブラリーの高貴な編者¹²¹⁾の目にとまっていた。上述のように、彼はオックスフォード時代 2 マイル・レースやいくつかの短距離レースに勝った。彼は 1850 年と 1851 年には大学イのクリケットの正選手として、1849 年、1850 年、1851 年にはカレッヂの正選手として対ケンブリッジ戦に出場した。彼は、1849 年、1850 年、1851 年に O. U. B. C.¹²²⁾のエイト・レースでボートを漕ぎ、1849 年には O. U. B. C. のフォアーや、1850 年の O. U. B. C. のスカルにも出場した。オックスフォードを卒業してからも彼は、グロスターシャーやデボンシャー、チェッシャーで、数多くの田舎のクリケットをやった。そして彼は I・Z や M. C. C.¹²³⁾ や無言劇では道化役などその他諸々の役をやった。彼は、その後しばらくの間ランニングをやらなかったが、「デボンシャーの第 4 連隊 (the 4th Battalion Devonshire Regiment)」が 4 つに分割された時、彼はリリマックで第 89 連隊の、あるカナダ人と 50 ポンドを賭けての 100 ヤード競走 (run a 100 yards match) をおこなって、その男に勝った。H・ワイアットは、陸軍大佐 (Lt. Colonel) としてデボン〔シャー〕連隊を退役し、数年後の今もランカシャーにあるセフトン伯爵 (Earl) の広大な領地の管理をしている。そして今は、むかし積極的に参加していたあらゆる種類のスポーツを『見物』するのに一流の腕前をもつに到っている。

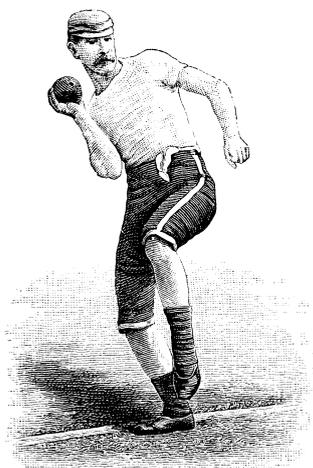
「これは、『はじめて物事にとりかかった (“set the ball rolling”)] 人々の一寸したスケッチであるが、彼等の最初の大会 (meeting) には明らかに人気があったけれども、時間がたつにつれてそれはゆっくりしたものになっていった。1851 年には、エクゼター校はプリンドンでの夏季大会とともに 1850 年の秋季大会をなお一層強力で推し進めていった。また、われわれは、このプログラムの中に走高跳と走巾跳 (a high and broad jump) の二つが導入されたと考える。この 2 種目で、C・A・ノースとホッチズの二人が有名になった。ついでながら後者は、間もなく 24 時間のうちに乗馬で 50 マイル (=80.5 km)、早馬で 50 マイル、競歩で 50 マイル歩くという賭けをする選手として有名になった。オックスフォードのリンカン校は、つづけてこのアイデアを採用することにし、色々なスポーツをおこなった。それから、ケンブリッジにあるカレッヂがこれに続いた。この後、このことは閃光のようにあらゆるところに一斉に拡がっていった。カレッヂやスクールの後にはロンドンで、つづいて各地方のクラブが競技スポーツの振興のために結成された。

ケンジントン・グラマー・スクールは 1852 年にこれらの正規のスポーツを始めたし、われわれは、この頃以降「定期的な競走や跳躍の試合 (annual foot race and jumping matches)」を行っていたロンドン周辺のいくつかの他の私立学校 (private school) があったと信じている。その競技会は、おそらく子どもたちの親が「アメリカの鹿」、「足の悪い鶏」、「グリニッチのカーボーイ」などと同じような「ペDESTリアン」の仲間たちに興味を持っていたので、学校でもこうしたことをおこなうように提案したり、奨めたりするようになったと考えられる。1853 年には、ハロー、チェルトナムの両校も陸上競技大会 (athletic meeting) を開始した。ダーラム大学もまた競技会 (gathering) をもったが、しかしその試合は自然消滅してしまったようである。

疑いもなく、この時期より前にも、いくつかのパブリック・スクールではレースがおこなわれていた。しかし、それらは「陸上競技大会 (athletic meeting)」と呼ぶのにはふさわしくないものであった。生徒用の「楽しみ (amusement)」としての「紙まき鬼ごっこ (‘hare and hounds’)¹²⁴⁾」の遊びも、他のイギリスの「競技娯楽 (athletic pastime)」と同じ位古いものである。シュトラッツ



A HURDLE RACE.



Putting the shot—first position.

は16世紀末に書かれた古いコメディーから引用をしている。その中で、ある「怠け者の子ども」がいうには

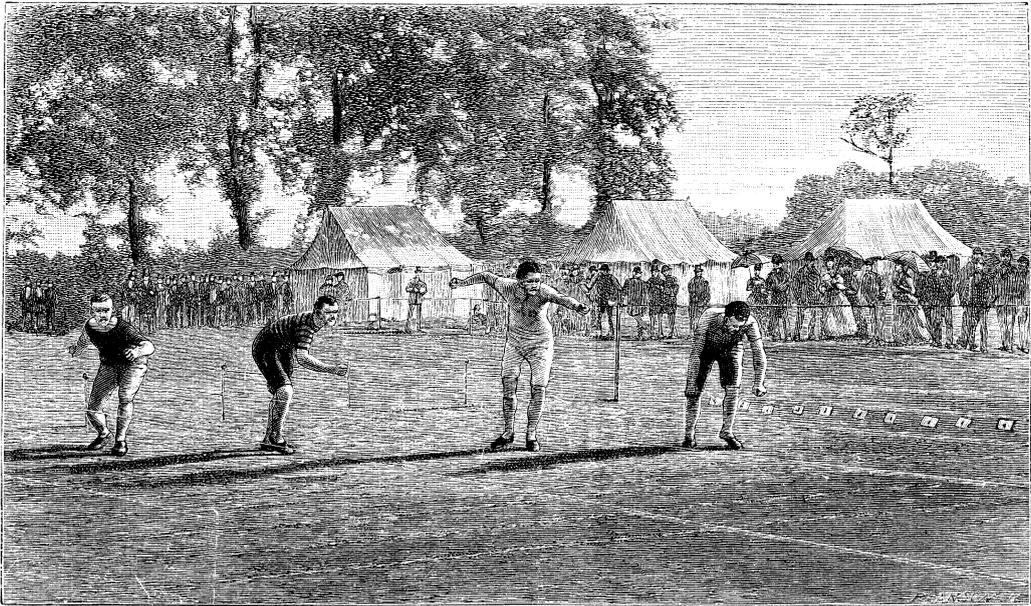
「そして、ぼくらが遊んだり、きつね狩をしたときはいつも、
ぼくは、学校中のみんなと逃げ去った」

これは疑いもなく、「紙まき鬼ごっこ」のことについて述べたものに違いない。1801年にこれを書いたシュトラッツは「きつね狩」とか「兎狩」と名付けていたつぎのような娯楽 (pastime) について説明をしている。即ち、「少年のうちの一人は走り出すことが許され、決まりが与えられる。それは、残りのものが彼を迫りかけるよりも前に、彼の仲間からある一定距離をおいて

いくことが許される 彼等の目的は、もしできることなら、彼が家に帰ってくるまでに彼をつかまえることである。」ラグビー校での「クリック・ラン(The Crick Run)」は1837年に設立されたらしい。シュールズバリでは、数年後に学校での「障害物競走」があったことが知られている。一方、1845年には、イートン校では別々の日に道路を使って行なった「定期的な障害物競走や短距離走、ハードル競走の大会」を開始した。本当に珍しいことなのだが、われわれは短い距離のハードル・レースのことを知る手がかりとなる最初の記述がここにある。¹²⁵⁾ 現在アマチュアの間で非常に人気のある「ハードル競走」はほとんどアマチュアのためのスポーツであるといえる。1853年の『ベルズ・ライフ』には、つぎのような種目が含まれていた「混成競技大会(an 'all round' competition)」の中で2人のアマチュアが相争ったらしいことが述べられている。即ち、1マイルレース、1マイルの後ろ向き競歩、4輪馬車の車輪ころがしでの1マイル競走、各々の高さが3フィート6インチ(=106.7 cm)¹²⁶⁾のハードル50台跳び越し、石拾い(stone picking)、重量投(weight putting)などがそれぞれであり、同じ年の『タイムズ』紙は、セイアズ中尉と「アストリー大尉」との間のフラット・レースやハードル・レースのことについての記事を連載した。われわれがすでに見てきたように、1852年か1853年頃に始まったすべての「学校競技大会(school meetings)」には、プログラムの中にハードル競走を含んでいた。しかし、ハードル競走の楽しみは、全く現代的なものとはいえない。というのは、ウィルソン教授(別名「クリストファー・ノース」)は19世紀の初頭、すでに同じような種類の何かで名人の域に達していたと思われる。この倫理学(Moral Philosophy)の教授は、彼の名前を陸上競技の歴史の1ページからははずすことができない程、競技者として素晴らしい名声を拍していた。ホーンはケンダルの義勇軍の同僚の兵卒(private)に「勝った」といううわさを持っている。後者は彼が「跳躍の試合(a jumping competition)」で一度も負けたことがないのを誇りにしていたので、ウィルソンは1ギニーを賭けて彼に挑戦をした。不敗を誇るチャンピオンは、15フィート(=4 m 57 cm)を跳んだだけであったが、ウィルソンは相手がびっくりする程の21フィート(=6 m 40 cm)を跳んだ。

1852年頃には、スクールやカレッジがランニングや跳躍、重量投(throwing of weights)など古くからのイギリスの「スポーツを競うための試合(a meeting for competitions)」を1日ばかりか午後に行うため、公認の適切なスポーツ組織が考えられる日がやってきた。しかし、すでに彼等がクリケットやボート・レースで試合をしていたのと同じ方法で競技スポーツも「プロとアマによる競技会(open competition)」、「選手権大会(championship)」や「2大学対校戦(contests between the Universities)」を行なおうというような関心は、まだイギリス人が夢にも見ないようなことであった。レースや跳躍の試合(match)はなおも「鬼ごっこ('tag')」や「陣とり('prisoner's base')」と同様、スクールでの娯楽(pastime)位にしか考えられておらず、ケンブリッジとオックスフォードの2大学においてさえも、人気の上昇の具合は非常にゆっくりしたものであった。¹²⁷⁾ 『近代陸上競技』を著わした著者は、これらの進歩について、つぎのようなことを述べている。「2つの大学では、オックスフォードのイートン校が主導権を握り、定期的に繰返されるようになった大会(meeting)を開催しはじめる1850年までは、競技スポーツに関する記述はどこにも見当たらない。1856年あるいは1858年になってからでも、こうしたスポーツの報告が載っている『ベルズ・ライフ』には、これらを『田舎でしかも興味ある段階』で、しかも『古きよきイギリス・スポーツの復活』と名付けている次第である。……」セント・ジョーンズ校やイマニアル校が先

頭に立ってケンブリッジでスポーツをはじめたおこなったと書かれている1855年までは、エクゼター校が唯一おこなっていた。オックスフォードでは、ベイリヤール、ウォードアム、ペンブルック、ウースターが1856年にエクゼターの例に続いた。オウリアルは1857年、マートンは1858年、クライストチャーチは1859年に、そして1861年には各々のカレッジにおける「大会 (meetings)」が一般的になった。1860年の年末のすべての在学生向けにおこなわれたオックスフォード大学のスポーツは、その設立に関して、マートン校のE・アークライト師 (Rev.) の努力に負うところが大きい。ケンブリッジでの大学スポーツは、1857年にはすでに設立されていた。しかし、カレッジごとの「定期的な大会 (meeting)」は、1863年までは、ちょうど姉妹校と同様に、時々しかおこなわれていなかった。はじめて2大学対校競技会 (Inter-Versity meeting)¹²⁸⁾がおこなわれた1864年になって、突然何故両大学で陸上競技の重要性が増してきたかは、1886年にリチャード・ウェブスター卿が「ロンドン・アスレチック・クラブ (L. A. C.)」における定例の夕食会でされたある発言から推測することができる。卿はその時、1年の間に6回の「ストレンチャーズ・レース」に勝って数ポンドをコインで受取ったが、翌年には、自分の友達は同程度の成績をあげて約40ポンド相当の賞品 (prizes) を銀細工師から受けとったと述べられた。



A GRASS COURSE.

1860年以後、間もなくこれらの「陸上競技大会 (athletic meeting)」はスクールやカレッジ生活の慣例の呼びものとなっていた。ダブリンのトリニティ校も1857年に試合 (meeting) を開始した。それ以来、試合は連続しておこなわれ、衰えることのない人気を拍するようになった。イングランドでは、ラグビー校がその最初の「定期戦」を開催し、ウィンチェスターは1857年、ウェストミンスターとチャータハウスは1861年に開催した。このすぐ翌年には、すべてのパブリックスクールが、2大学と同様に各種のスポーツをおこなっていた。パブリック方式の増大と人気は、疑いもなく、イギリス中に陸上競技大会の精神をより育成し、拡大していった。学校で陸上競技

に熱中して健康や「楽しみ(pleasure)」や名声を得た若者たちは、学校を卒業するとともに彼等の趣味(tastes)を中断してしまう筈はないだろう。だから、競技熱はイギリス全土にわたって親元に帰ってくるパブリックスクールの卒業生たちによって「競技会」を推進する「はずみ」に大きく助けられたことは確かである。

しかしながら一方、多くのスクールでは、1850年以後間もなく、試験的に競技スポーツを採用しはじめた。しかし、10年後になってはじめて、われわれは職業的「ペDESTリアン」とは別の自分たち自身の大会(meetings)をおこなっている一群の「アマチュア競技者」のことを耳にしはじめるのである。この時代を通じて『ベルズ・ライフ』の中には、しばしば「アマチュアがプロフェッショナルに対して試合をしていた(were matching)」ことが載っている。さらにわれわれは、競技者たち(contestants)がアマチュアとして記載されているアマチュアの試合の記録(ちょうど、1853年にグリーン氏とマーチン氏の間でおこなわれた150ヤード走の様な)のことでなく、「ペDESTリアン」の加わった「アマチュアの試合」(その前年に「アマチュア」のグリーとマイケル・ターナーの間でおこなわれた試合の様な)の場合のことも知っている。しかしながら、「アマチュア」にとっても機は熟しつつあった。というのは、非常に気位の高い『タイムズ』紙でさえも、セイアズ中尉とアストリー大尉の試合のことや、フォエリー氏とアーサー・ウェルズリー卿の間で、1854年にドニブルックの道路で150ギニーを賭けて行われた試合(match)の記録を載せているからである。しかし多くの人々は、スクールやカレッジ以外のところでも「陸上競技大会(athletic meeting)」を実施してほしいと願っていた。そこで、「王立砲工会社(Honourable Artillery Company)」が母体となって、1858年にその会社の社員のために試合を開催した。こうした要求の原動力はおそらく、1860年およびその翌年におこなわれた「プロのペDESTリアン主義」についての大衆的興奮が、再び燃えあがったことによるものだと思われる。1860年にはカナダの原住民で「デアーフット(鹿の足)」として大変有名だったL・ベネットがイングランドにやってきてイギリス最強のペDESTリアンたちと転戦を始めた。そのことは、過去10年、あるいはそれ以前の長い間よりも、もっと大きく大衆の興味を起こさせた。ベネット、ラング、シャー・アルピゾン、テディー・ミルズ、ジャック・ホワイトや当時の他の多くの有名選手たちの成績について、人々は再び競走(foot racing)のことを話題にするようになった。そして1861年の冬には、「ウエスト・ロンドン・ローイング・クラブ」は、彼等ボートを漕ぐ人々が冬期のシーズン中のトレーニングによって、からだがよく動き、体力を保っておくには激しい肉体活動と練習をすればよいと考えて、「陸上競技大会(athletic meeting)」を開催した。われわれが見付けることのできる限りでは、アマチュアのための最初の「オープン・レース」は、1862年の夏におこなわれた。この時、「ペDESTリアン」のハンディキャップ・レースの興業主のW・プライス氏は、見物の人達に新しい呼び物を見てもらおうと考えて、ハクニーのグランドで「アマチュアに限って」の競走に「ハンサム・シルバー・カップ」を寄贈しようと決めた。1862年6月26日におこなわれたこの「オープン・アマチュア・ハンディキャップ大会」の『報告書』は、この試合が賭をする様な方法で好奇心を刺激する方法をとったために、むしろ失敗したと述べている。しかし、アマチュアにとっては、このレースはもっと他の理由で興味があった。最初の決勝について報告者は、その賭率がジョンソン氏に勝ったグリーン氏には6対4であったが「賭の金額はそう大したことはなかった」と述べている。もう一方の決勝レースでは、スパイサー氏は、(ついでながら



Halt over.

彼は「王立砲工会社」の社員であったが)後はど数多くの選手権の保持者として偉大な名をなしたチナリー氏とゴールにむかってスタートを切った。この場合は、スパイサー氏はチナリー氏よりも長持ちして、彼に勝った。

同年8月30日には、ブライス氏は1/4マイルと3/4マイルの2つの「オープン・レース」に賞品 (prizes)¹²⁹⁾を寄贈した。1/4マイルには、競技者たちがこの話を聞けば驚くにちがいないが、退職後の公務員の競歩選手のC・M・カロウ氏が「マルチン」と名乗って選手の一人として出場していた。同じように、後に競歩選手権者となったウォルター・ライ氏もまた、彼自身の名前〔本名〕で出場していた。もうひとりの選手はC・H・プレスト氏であったが(後の有名なアマチュアだが、彼の「アマチュア性 ('amateurity')」にはいくらかの疑問があるが)、彼はベイカーの名前で走っていた。当時は、アマチュアの競技者は自分の「競技熱 (taste for athletics)」を世間から隠すのが一般的な考え方であった。だからスポーツ新聞の記事の中にあるこの試合の結果報告は、競技者を R e 氏とか N m 氏等々の奇妙な方法で表記して載せている。しかし、恐らく「わからない方がむしろ偉大に見える ('omne ignotum pro magnific')¹³⁰⁾」という原則にもとづいて行動するこの報告者は、芽の吹きはじめたアマチュアにも、このような神秘的な名前の雰囲気をつけかけることによって、偉大さを貸し与えていたのだと考えていたのだろう。ハクニー・ウィックのおける第2の試合の3/4マイル・レースにおいて、チナリー氏は10ヤード先にスタートしておきながら、無敵のスパイサーに再び屈しなければならなかった。

離れ離れになっているロンドンのアマチュアたちが自らクラブを作る努力をしたのは、翌年になってからであった。1863年の6月には、「ウエスト・ロンドン・ローイング・クラブの大会 (meeting)」やブライスのハンディキャップに参画したこれらのメンバーに含まれているある紳士たちが、有名な商業の中心街の名をとってクラブの名とした「マンシング・レーン・アスレチ

ック・クラブ(M. A. C.)」を組織した。それは、このクラブの創設者の大多数の人が商業に従事していたからである。1864年には4月9日にプロンプタンの「ウエスト・ロンドン・グランド」で最初の大会(meeting)を開催した。しかし、その大会には十分な注意が払われていなかったもので、われわれは、その大会(meeting)の報告が新聞に載っているのを見出すことはできない。もう一つの大会が同じ年の5月21日開催されたが、その大会でチナリー氏はマイル・レースに勝ったが、その時の大会の報告は、すべてのスポーツ新聞に公表された。この年、220ヤード(=201.2 m)と10マイル競歩(=16.1 km)の二つのレース用のチャレンジ・カップがクラブに寄贈された。この二つは、それ以来華やかな制度となっている。1866年の春にはそのクラブは名前を改めて、今日もそうなっているように、「ロンドン・アスレチック・クラブ(L. A. C.)」となった。

アマチュアの競技スポーツが組織をもっておこなわれるようになったのは、実際は1864年になってからであるといえる。正規の組織をもった競技クラブがこの年になって「オープン・レース」を開催しはじめただけでなく、同シーズンには「大学対校競技(Inter-University sports)」の制度もみられるようになった。1863年には、2大学の間に「対校競技会(Inter-Versity contest)」を開催しようとの協議が続けられたが、何事もきまらない前に、クリケットとボートの夏の季節(term)がやってきて、競技者(athletes)を集めるのが不可能だということがわかった。しかし、1864年3月5日¹³¹⁾には、ケンブリッジの人がやってきて、オックスフォードの仲間と「クライストチャーチ・クリケット・グランド」で相見見えることになった。この時は、勝敗を決定するための「奇数の種目('odd event')」がないという大義名分のもとに、どちらの側も勝者とはならなかった。プログラムは8種目から成り立っていて、それぞれの大学は4種目ずつ優勝した。それ以来、いうまでもなく、この試合は毎年「定期的」に開催されたが、1867年までは、大学の競技者たちがロンドンにくることはなかった。

同年の1864年、「公務員達(the Civil Servants)」が、その最初の試合(meeting)を催したようである。その大会は今も年々、しかも重要な種目(event)として行なわれているものである。しかし、アマチュア競技がロンドンと同様に地方にまで普及されたのは、1、2年後のことであった。1865年にはいくつかのフットボールとクリケットのクラブが大会(meeting)を企画推進(promoted)した。しかしイギリスの国中を通じて「陸上競技」が一般に行なわれるようになったのは、1860年以降のことである。その頃には、アマチュアは、当時のプロの「ベデストリアンたち」とは、彼らが名うての「負けるために力を出さなかった」り「買収した」りする戦術('roping' and 'squaring' tactics)を用いるために関係を持たないということを決めていた。1866年の初頭には、大学卒業生とロンドンの競技者たちによって、「アマチュア・アスレチック・クラブ(A. A. C.)」が組織されたが、その設立趣意書にはクラブは「アマチュア競技スポーツの競技会(competitions)を行う設備がないという要求を満し、かつ、すべての階級の紳士競技者(gentleman amateur)がプロフェッショナルの走者とやむを得ず一緒になる時以外は、共に練習をしたり、試合(competing)をしないでも済む方法をできる限り完全に与えるために」組織されたと公表した。この新しく組織された「A. A. C.」は、1866年の春に「選手権大会(championship meeting)」を開催した。それは明らかに成功した。これは今もなお「アマチュア陸上競技協会(Amateur Athletic Association)」の運営の下に、長年続けられている大会の最初のものであった。「A. A. C.」の創立者たちの意図は疑いもなく彼等のクラブをクリケット競技者に対する「M. C.

C」と同様の位置づけにしておこうとするものであった。そしてこの計画は、「選手権大会」が非常に成功だったので、当初には将来も見込みのあるものとされて、2年後には、このクラブはリリー・ブリッジにアマチュアのための立派な「陸上競技場 (running ground)」を開設した。それは、早速アマチュア競技の本拠になった。しかしながら、活発な競技者達は「A. A. C」よりも「L. A. C [=London Athletic Club]」の方に関連を深めていたので、前者はやがて「選手権大会」以外にはどのような大会 (meeting) をも開催しなくなった。

しかし、1866年以降の陸上競技の歴史を順次述べる必要はまずないだろうと思う。その年までには、すでにスポーツは多くの田舎の街や大きい地方都市の大部分において組織化されていた。1867年に発行された記録集の『競技者 ('The Athlete)』には、イングランドで催された100に近い大会 (meeting) の記事が載っているし、翌年に出た同書は、その数が150にも膨れ上がったことを示している。アマチュア競技の進歩はそれ以来、急激でしかも継続的になってきていて、今日、「定期的な大会 (meeting)」を持たない街はイギリス国内をみても殆どなくなってきている。1866年までに、アマチュア競技は明らかに現在と同じ形態をとってきている。そして、それぞれのクラブにはその間、栄枯盛衰があり、人々の人気も消長はあったものの、どの時代のイギリス人も同じ形式の競技スポーツによって英気を養ってきている。イングランドにおいて成長を就げたスポーツの体系は、カナダ、オーストラリアなどのイギリスの植民地だけでなくアメリカ合衆国でも成功裏に移植され、今日ではイングランド人、アイルランド人、スコットランド人、アメリカ人や植民地の人々が「本国 (the Old Country) の選手権大会」で共に相争っているのを見付けることは、それほど珍しいことではない。 (完)

訳者注

- 1) Inner Temple は、イギリスの Barrister [Solicitor とともに弁護士資格の一つ] になるために入会しなければならない四つの「法学院」(Inns of Courts) の一つで、このほかに、「Lincoln's Inn」, 「Gray's Inn」, 「Middle Temple」がある。
- 2) 'Who's who' によれば、シャーマン卿は高等法院 (The Higher Courts) の三つのうちの一つの King's Bench Division (「王座部」) の judge であったと記されている。[ここは、英国の普通法によって処理される通常の事件を処理しているところである。] また、この裁判官になるためには、一般に、Barrister の経験が10年以上必要で、実際には20~25年以上の経験者から選ばれているようである。しかも、通常は、「King's [Queen's] Counsel (王室顧問弁護士)」の称号をもつものの中から選ばれる。卿は、この K. C. の称号を1903年 (46歳のとき) に得ている。
- 3) たとえば、鶴岡英一『イギリス・スポーツの系譜』(広島大教養部紀要Ⅱ第4集, 1970) や岸野雄三『体育の文化史』[体育図書館シリーズ17](不昧堂, 1975), 岸野雄三・多和健雄篇『スポーツの技術史』(大修館, 1972) などがある。
- 4) 'Hanc Olim veteres vitam coluere Sabini, ... sic fortis Etruria crevit Scilicet et rerum facta est pulcherrima Roma.' と、Vergilius Georgica II 533 からの一文が、冒頭に引用されている。(引用された意味は、充分わからない。)
- 5) Strutt, Joseph (1749 - 1802), イギリスの文筆家・画家・彫刻師・好古家。『The Sports and pastimes of the people of England』(1801) などをあらわした。多数の著書は、その綿密な研究と興味ある版画によって、貴重である。[斎藤勇編『英米文学辞典』p. 1051, 研究社]
- 6) Wilkinson, Henry. F の『Modern Athletics』(1868) p. 9, 30行目から引用した一文である。本書が近代陸上競技誕生期に書かれ、陸上競技の歴史について、ギリシャ・ローマ時代にまで、遡上って、

- 記述している点で、貴重な書物である。(訳者は、この書のコピーを1980年代初頭に「英国文化センター」を通じて入手し、陸上競技のルール発展史に関する論文の資料として活用してきた。)
- 7) Henry V (of Monmouth) (1421-1471), 英国王 (1413-22在位)。Henry IV 世の子。とくに王自身が陣頭指揮をして「ブルゴーニュ派と気脈を通じつつ大陸に進撃, 1415年アザンクール〔アジャンクール〕に大勝, フランス太子シャルル(のちのシャルルVII世)をアルマニヤック派とともに南仏に逃避せしめ, 北フランス, ノルマンディーを占領, 20年ブルゴーニュ派と交渉して「トロアの和」を妥結, シャルルVI世の娘と婚してフランス王位相続権を手に入れた」。(大野真弓編『イギリス史(新版)』p.107, 山川出版社)
- 8) Canterbury, イングランド Kent 州の都市で英国国教総本山の所在地。中世時代には聖堂にある Saint Thomas a Becket の墓に参詣することが盛んであった。[市川三喜『新英和辞典』p.253, 研究社]
- 9) Fitz Stephen, William, (?-?1190) Thomas a Becket の友人でその伝記 Vita Sancti Thomas (1174, 初版1723) の著者。(尚, この伝記は12世紀ロンドンの重要な研究資料である。)[斉藤勇編『英米文学辞典』p.347, 研究社]
- 10) Henry II Curtmantle (1133-1189), 英国王 (1154-89在位) アンジュー (Anjou) 家最初のイングランド王。父アンジュー伯ジョフロア (Geoffroi) IV Plantagenet (1113-1151) からアンジュー伯領継承し, またエレアナ (エレオノール) と結婚してポアトゥー, ギェンヌ, ガスコニュー等を得, またフランス王ルイVII世と戦って (1157-80) ブルターニューを獲得し (69) フランスの西半分を手中に収めた。またウェールズを征服し (63, 65) スコットランドに勢力を伸ばし, アイルランドを攻略し (71), 広大な領土を支配した。財政を整え, また巡回裁判制を拡大して王の司法権を全て国に及ぼし, 同時に陪審制度を採用した。このように中央集権を強化して領土の分裂を防ぎ, また王直属の軍隊を創設した。教会の裁判権を制限して, これに反対したカンタベリー大司教ベケットを殺害させたが (70), 教会の独立は宗教改革まで依然として維持された。[『岩波西洋人名辞典』p.1359, 岩波書店]
- 11) London の旧市部市長 (Load Mayor) 及び市会の支配する約1マイル平方の地域で, 英国の金融・商業の中心地区。[前出『新英和辞典』p.311, 研究社]
- 12) 『Pickwick』(『Pickwick Papers』), C. Dickens の小説。『The Posthumous Papers of the Pickwick Club』が正式の表題。1836-37年に月刊分冊で出版。Pickwick Club の会長 Samuel Pickwick は3人の会員 Tracy Tupman, Augustus Snodgrass, Nathaniel Winkle とともに旅行中の事件や観察を報告することにし, 4人が種々な人物に会い, さまざまな事件が派生するのをつづったもの。[前出『英米文学辞典』p.826, 研究社]
- 13) Dickens, Charles (1812-70), イギリスの小説家。出世作 The Pickwick-Papers は1836-37年にわたって月刊分冊で発刊され非常に人気を呼び, 一躍国民的な作家として認められ, 彼の従来の苦闘もようやく実を結んだ感があった。(中略)彼の描いたかすかすの人物は不思議な潑刺さを持ち, 彼らの機知と humore に富んだ言行はつねに読者の心を捉えずにはおかない。もちろん, これらの潑刺たる生彩は主として Dickens の巧妙な戯画的技巧からきている。[前出『英米文学辞典』p.262-263, 研究社]
- 14) 『The Knight of Swan』, 作者及び著作時期ともに不明。
- 15) 「騎上試合には, トーナメント (Tournament) とジアウト (Jousts) とがあって, トーナメントは, 云はば小規模の騎兵戦のごとく, 多数の騎士の集団が双方に一定の距離に対峙し, 長槍と剣を以て戦う方法であり, ジアウトは, 二人の騎士が双方に相対し, 長槍と剣をもって全速力で接近し, 相手の甲又は胸板目がけて突きあうのであって, 落馬した場合には, 地上で剣をもって相手が屈するまで闘った。試合者は, 完全に武装し, 剣は, 通常刃引きをし, 槍の穂先は平面又は, 僅かに歯形をした板金をつけた。顛落, 熱気や塵埃による窒息, 長槍の折片による刺傷等のために死傷するものが少なくなかった。」[今村嘉雄『西洋体育史』p.54, 日本体育社]
- 16) 『Knyghthode and Batayle』 (=Knighthood and Battle) 作者及び著作時期不明。

- 17) 『The Three Kings' Sons』作者, 著作時期不明。
- 18) Edward III (1312-77), 英国王 (1327-77在位) エドワードⅡ世の子で百年戦争を起した。なお、当時の弓術の^{しやだな}射撃での練習が、農村生活の主なスポーツ、昂奮のたねとなった。エドワードⅢ世は王の布告をもってこれを奨励し、人々を射撃からわきみちに引きはなすようなハンドボール、フットボール、ホッケー、兎狩り、闘鶏その他やくざなゲームを禁固刑をもって禁止した。(中略)「長弓がもっと効率の低いテューダー時代の手持銃に次第にとって代られるようになったのは、議会制定法や布告にもかかわらず 村人が「フットボールその他のやくざなゲーム」、あるいはラティマーの考えたように「木球戯、飲酒、女遊び」のために、弓術に身をいれなかったように思われる。」[G. M. トレヴェリアン, 大野真弓監訳『イギリス史Ⅰ』p. 218-219, みすず書房]
- 19) Henry VIII (1491-1547), 英国王 (1509-1547在位) 兼アイルランド王 (1541-1547在位) ヘンリーⅧ世の次子。亡兄アーサーの妻カサリン(アラゴンの)と結婚(1509)。神聖同盟に加わってフランスに対抗し、自ら軍を率いてフランスを破った(13)。またイギリスでは、スコットランド王ジェームズⅣ世 (James IV 1473-1513。在位1488-1513) を敗死させた(同)。ウルジを大法官に任じ(15), 教皇レオⅩ世から 信仰保護者 Fidei Defensor という称号を授けられた。外交に関しては、終生フランス王フランソワⅠ世とスペイン王カルロスⅠ世(カルルⅤ世)を操って勢力の均衡を図るに努めた。カサリンとの離婚を企て、ウルジが教皇からその認可を得るに失敗したので、彼を罷免し、(Th.) モーアを大法官に叙した(29)。やがて王はひそかにアン・ブーリンと婚し(33)、両者の間にのちのエリザベスⅠ世が生まれた。カサリンとの離婚問題について教皇と長い間争い、遂に首長令を発して(34) 英国教会の首長となり、イギリスにおける教会と聖職者とを督したが、モーアが王の首長権を否認したので彼を処刑し(35)、国内の修道院を圧迫し、またカトリック教会の特権および財産を縮減した。アン・ブーリンを姦通罪の廉で斬首し(36)、ジエーン・シーモアと結婚(36)、シーモアの歿(37)後、アン(クレーヴの)と結婚(40)、同年離婚、カサリン・ハワードと結婚(同)、姦通の廉でこれも斬に処し(42)、最後にカサリン・パーと結婚した(43)。王はスコットランドを併せようとして果さず、またフランスのスコットランド干渉を妨げるためカルロスと結んでフランスを討ったが(40)、カルロスの単独講和により危機に陥り、治世最後の2年は、ルター派の諸王と結ぶに努めた。しかしプロテスタントに対しては終世嫌悪の情をもった。治世中は中央集権制をとり、議会の勢力を発揮させ、また海軍力を増大した。晩年は残虐に陥ったが、概ね大きな民望を得た。[前出『岩波西洋人名辞典』p. 1360, 岩波書店]
- 20) Edward II (1284-1327), 英国王 (1302-1327在位) エドワードⅠ世の子。「かれは生来暗愚、内は前代に抑圧されていた貴族が再び勢力を恢復し、はじめヘンリーⅢ世の第2子エドモンドを始祖とするランカスタ伯のトマス、のちヒューデスペンサー兄弟が、こもごも王の寵臣として権を専らにした。」[大野真弓編『イギリス史(新版)』p. 93, 山川出版社]
- 21) ヘンリーⅧ世のこと19)脚注参照。
- 22) Sir William Forest, 詳細不明。
- 23) 'Poesye of Princelye Practyce', 上記フォレストの作らしいが、著作時期および内容不明。
- 24) Elyot, Sir Thomas (1490頃-1546), イギリスの外交家、人文学者。ウルジに認められて枢密院書記となり(1523-30)、ナイトを授けられ(1530)ヘンリーⅧ世の離婚に同意を得るため、カルルⅤ世の許に大使として派遣された(1531, 1535)。イソクラテスの訳など著書が多く「為政者論(Boke named the Governour)」(53)は政治家の道德教育を扱ったもの。[前出『岩波西洋人名辞典』p. 267, 岩波書店]
- 25) 本文では『The Boke called the Governour』となっている。
- 26) 『Sndrye fourmes of exercise necessarye for gentilman』
- 27) [希] Galenos, [英・仏] Galen (129頃-199), ギリシャの医学者、解剖学者、哲学者、ペルガモンの人。スミルナ、コリント・アレクサンドリアで医学を修め、ローマに赴いたが(162)盛名の故

に反対を招き、ローマを去ったが(166)やがてマルクス・アウレリウス帝に迎えられてローマに定住した(169)。(中略)医学の科学的基礎を築き、精確科学の一とするに努め、種々の動物の屍体並に生体解剖による観察に従い人体の構造について断定を下した。(中略)彼の解剖学はそのうち中世に到るまで標準となった。(後略)。「前出『岩波西洋人名辞典』p.377, 岩波書店]

- 28) *'De Sanitate tuenda'*
- 29) Achilles, [希神]ペレウスとテティスの子ネオプレストモスの父, ホメロスの「イリアス」の主人公。幼児の時テティスは彼を冥府の川ステュクス(Styx)の水に浸して不死身にしたが、彼を支えていた踵だけは水がつかなかった。のちケンクウロイのケイロンを師とし文武にたけた武将となった。[前出『岩波西洋人名辞典』p.15, 岩波書店]
- 30) Alexander the Great (356-323BC), アレキサンダー大王(Macedoniaの王)。ギリシアおよび小アジア, エジプトからインド洋に到るペルシア帝国の征服者。[前出『新英和辞典』p.41, 研究社]
- 31) Epaminondas (前420頃-362), テバイの将軍, 政治家, 独特の斜陣法戦術を案出, ペロピダスと共にテバイの覇権を打ち建てた。貧しい貴族の出。(中略)テバイ代表としてスパルタと会談したが(前371), スパルタがボイオティア支配の放棄を要求したので決裂。スパルタのクレオンプロトスとレウクトラに戦ってこれを大いに破り, 名声を挙げてテバイの覇権を確立。ペロポネソスに侵入(370), アルカディア, メッセニアを解放。ペロポネソス遠征を行ったが(369, 367)成功しなかった。アテナイの海上勢力に対抗するために海軍を建設し, ビザンティンまで航行してアテナイ同盟市を離反させた。その結果アルカディア戦争が起り(362), 再びペロポネソスに大軍を率いマンティネイアで敵を破ったが, 彼も重傷を負って死んだ。兵法家として有名だが, 人格高潔, 雄弁でも優れていた。[前出『岩波西洋人名辞典』p.260, 岩波書店]
- 32) Ascham, Roger (1515-1568), イギリスの人文学者。母校ケンブリッジ大学ギリシア語講師(1537)の後, エリザベス1世の家庭教師, エドワードVI世, メアリ女王のラテン語秘書となる。イギリスにおける人文主義教育思想の代表的人物で, その著『弓術論(Toxophilus)(1545)』は体育を重んずべきことを対話体の英語で書き, 死後発表された。『教師論(Schoolmaster)(1570)』とともに平明な散文英語の発達史上注目すべきもの。[前出『岩波西洋人名辞典』p.24, 岩波書店]
- 33) 『Toxophilus』
- 34) Harleian M. S. S., Oxford 伯 Robert Harley と Edward Harley との2代にわたり収集された原稿1754年国家に買い上げられ, 現在 British Museum にある。[前出『英米文学辞典』p.436, 研究社]
- 35) Shakespeare, William (1564-1616), イギリスの詩人・劇作家。S. T. Coleridge のいわゆる 'myriad-minded Shakespeare' は1564年4月(受洗は26日であるが, 23日が official birthday となっている) Warwickshire の Stratford-upon-Avon に生まれた。父は John Shakespeare, 母は Mary, 詩人は第3子で長男であった。父は農業および商業に従い, 一時は相当の産をなし, 町の有力者であり, 1568年には bailiff になったが, まもなく没落, 詩人も正規な教育は小学校以上のものは受けなかったと想像される。1582年8歳年長の Anne Hathaway と結婚, 1男2女をもうけたが, その後, 年代・理由ともに不明であるが(Sir Thomas Lucy の鹿園から鹿を盗んだため, という伝説があるが確証はない), おそらく1585年前後に故郷を捨ててロンドンに出た。たまたま郷里に巡業した Leicester 伯抱え一座に加わって上京したという説はにわか信じ難いが, 上京後いずれかの劇団に投じたことは想像に難くない。観客の馬番を勤めたという伝説の信頼性には問題があるとしても, それに類する下積みの生活から出発して, やがて舞台上に登場するようになり, 劇作に手を染めることになったのであろう。そうして1592年には R. Greene から 'upstart crow' と嫉妬され, 'Johannes factotum' (何でも屋)と悪口まじりの羨望を与えられるほどになった。しかしこの言葉は俳優としての彼をさすものか, 作家としての彼に与えられたものかは不明である。Shakespeare はまず俳優として名をあげたらしく, Ben Jonso の *Every Man in His Humour* や *Sejanus* に登場した記録があり, *Hamlet* の亡霊や *As you like It* の Adam に扮したという伝説もあり, 1594年に参加した新編成の Lord Chamberlain's Men (1603年に King's Men となる)の 'principal actors' の一人に数えられていた。劇作を

始めた時期はわからないが、おそらく既存作品の加筆補正という修行時代をへて、1590年頃には独立した劇作家として立つようになったのであろう。以後20余年間に37編（合作を含めて、今日 Shakespeare の作品と公認されるもの）の戯曲と7編の詩を書いた。一方には劇団の大幹部として、あるいは Globe, Blackfriars 両劇場の株主として産をなし、1597年には郷里 Stratford の New Place に広大な宅地を購入、1602年には農牧場を所有するなど、少なくとも経済的には恵まれた生活を送り、50歳に達する前に筆を折って故郷に帰り、1616年4月23日に病歿した。しかし伝記的資料の乏しいため、極端な者は彼の実在をさえ疑い、Shakespeare は F. Bacon の仮名にすぎないとする Baconian theory をはじめ、多くのいわゆる 'Anti-Stratfordians' が今日も存在しているが、もとよりその根拠はきわめて薄弱である。Jonson から 'sweet swan of Avon' と呼ばれ、'gentle Shakespeare' と親しまれた詩人の実在を信じて差しつかえないだろう。偉大な芸術家であると同時に世故にもたけた人物であつたらしいことは、伝記によってほぼ知られることである。(後略)[前出『英米文学辞典』p. 977, 研究社]

- 36) 『Henry IV, *King, Parts I and II*』, Shakespeare の史劇。初演は1598年以前。出版は第1部が1598年、第2部は1600年、quarto 版。第1部は Douglas, Mortimer, Glendower らの諸貴族と結んだ Percy 一家の謀反を扱ったものであるが、劇の興味は皇太子 Henry (Hal) を中心とした市井無類の一派 Falstaff, Poins, Bardolph, Peto らが舞台せましと活躍する脇筋の方にある。ことに肥大漢 Falstaff は作者が創造した最も有名な人物の一人で、追い剥ぎを敢行する条 (II. ii) や、Shrewsbury の戦場で演ずるこっけいな武者ぶり (V. iv) は永久に観客の哄笑を呼ぶであろう。第2部は Scroop 大司教、Lord Mowbray, Lord Hastings の謀反、Henry IV の病死、Henry V の即位などを扱ったもの。Flastaff は依然として喜劇の主人公をつとめ、ことに募兵のため地方に出張して判事 Shallow, Silence らと問答する一条 (III. ii) は、Henry IV の臨終の場 (IV. iv) とともに作中の傑作であろう。彼ら一味は皇太子の即位とともに重用を期待したが、かえってその放埒を戒められ投獄される。[前出『英米文学辞典』p. 455, 研究社]
- 37) Falstaff, Sir John Shakespeare の『Henry IV, *Merry Wives of Windsor*』などに出る大兵肥満の老騎士。いわゆる miles gloriosus 型の性格。酒びたりの無頼漢、ウソつきの臆病者、それでいて humour, 機知、口をついて出るこの愉快な人物が、皇太子 Hal (即位して Henry V) と肝胆相照らす親友として活動する場面は Shakespeare 史劇中の圧巻である。この驚くべき複雑な性格に関しては Maurice Morgann の有名な評論がある。[前出『英米文学辞典』p. 331, 研究社]
- 38) Poins, Shakespeare の史劇 Henry IV 第1部および第2部に出る人物、Falstaff の仲間。[前出『英米文学辞典』p. 843, 研究社]
- 39) 『Henry VI, *King, Parts I, II, and III*』, Shakespeare 作と考えられる史劇。作者の推定にも最も複雑な問題を含んだ戯曲。全3部が Shakespeare の作品としてまとめられたのは First Folio (1623) においてであるが、第2部・第3部の原作はそれぞれ *The First part of the Contention betwixt the two famous Houses of Yorke and Lancaster* (1594)、*The true Tragedie of Richard Duke of Yorke, and the death of good King Henrie the Sixth* (1595) なる題名で、作者の名を付けずに出版されている。従来はこれをもってのちの folio 版第1部・第2部の粉本と考え、その作者として R. Greene, Peele, Marlowe, Lodge, Nashe の名が挙げられていたが、最近ではこの2編も folio 版の作品も元来は同一作品であったと見なされるようになった。ただし Shakespeare の単独作かどうかは疑わしい。3部を貫く筋は Henry V の葬儀 (1422) から Henry VI の横死 (1471) まで約50年にわたり、国外では Joan of Arc の出現以来フランスにおける England 軍は連戦連敗して領地を失ない、国内では York, Lancaster 2家の確執からいわゆるバラ戦争の大内乱に及び、この間に処して優柔不断な Henry VI と男勝りの Queen Margaret of Anjou の苦慮とを描いている。[前出『英米文学辞典』p. 455, 研究社]
- 40) Barclay, Alexander (? 1475 - 1552), Scotland 生まれの詩人、翻訳家。のちにフランシスコ会修道士となる。ドイツの S. Brant からの翻訳 *The Ship of Fools* (1509) は、当時の政治と宗教の腐敗

に対する風刺詩として、広く愛読されたほかに、『牧歌 (The Eclogues)』(1515)がある。[前出『英米文学辞典』p. 62, 研究社]

- 41) 『The Eclogues』, Alexander Barclay のイギリス最初の牧歌, 1515年頃の作で、ほとんど韻をふんだ couplet で書かれている。Spenser の前駆をなし、宮廷生活の悪徳と田園の幸福とを描き、教訓と諷刺をふくむ。Mantuan および Aeneas Sylvius (1405-1464) の牧歌を模したもの。[前出『英米文学辞典』p. 294, 研究社]
- 42) Russell, 詳細不明。
- 43) 『History of Guildford』, 著作時期不明。
- 44) この詩文については、原文をここに掲載する。
- Any they dare challenge for to throw the sledge,
To jump or leape over a ditch or hedge,
To wrastle, play at stoole-ball or to runne,
To pitche the barre or to shoote of a gunne,
5 To play at loggets, nine holes or ten pinnes,
To trie it out at football by the shinnes ;
At ticke-tacke, saw nody, maw and ruffe,
At hot cockles, leap frogge and blind man's buffe,
To drink the halfer pottes or deale at the whole canne,
10 To play at cheese or pue or inkehorne,
To daunce the morris, Play at barley breake,
At al exploitie a man can think or speake,
At shove-groate, venter point and cross and pile,
At 'beshrew him that's the last at any stile,'
15 At leapinge over a Christmas bonfire,
Or at the drawing dame out of the myre,
At shoote-cocke, Gregory, Stoolball and what not.
Pick point, toppe and scourge to make bim holt.
- 45) Robert Laneham, 詳細不明。
- 46) long account of the revel at Kenilworth, 詳細不明。
- 47) Nichol, 詳細不明。
- 48) 『Progresses of Queen Elizabeth』, 著作時不明。
- 49) Harrison, William (1534-1593), イギリスの地理学者・年代記学者。Holinshed の chronicles に含まれる。An Historical Description of the Islande of Britayne (1577) などをかいた。[前出『英米文学辞典』p. 439]
- 50) 『Description of England』, 著作時期不明。
- 51) Northbrooke, John, 詳細不明。
- 52) Bowdlerised, 「バウドラ流(書物の中の不慮と思われる箇所を Bowdler 式にむやみに削除訂正すること)」。尚 Bowdler, Thomas (1754-1825) はスコットランド人の医師; Shakespeare の原作から道徳上いかがわしいところを遠慮なく削除して The Family Shakespeare (10 vols. 1818) を出版した人。[前出『新英和辞典』p. 193, 研究社]
- 53) 『Anatomie of Abuses』, 55) 脚注参照。
- 54) Stubbs, Philip (1555頃-1610頃) イギリスのパンフレット筆者・清教徒。過激な清教徒の立場から演劇をはじめ当代の悪風を痛烈に攻撃した『The Anatomie of Abuses』(1583) はたちまち数版を重ね T. Nashe はこれに対する反論として『The Anatomie of Absurditie (不条理)』(1589) を書いたが、今日では好古の当代風俗資料にすぎない。ほかに『A Cristal Glasse for Christian Woman』

- (1590) が有名。[前出 『英文米文学辞典』 p. 1052, 研究社]
- 55) Naogeorgus, Thomas, (羅 Th) 本名 Th. Kirchmair (Kirchmeyer) (1511 1563), ドイツの新ラテン派詩人, 劇作家, プロテスタントの牧師。教皇政治の腐敗を諷り, M. ルターを支持する戯曲 『Pammachius』 (1538) や諷刺詩 『Regnum papisticum』 (1553) などを書いた。[前出 『岩波西洋人名辞典』 p. 948, 岩波書店]
- 56) Googe, Barnabe (1540 1594), イギリスの詩人。牧歌々集 『Eglogs, Epytaphes, and Sonettes』 (1563) のほか翻訳がある。[前出 『英米文学辞典』 p. 401, 研究社]
- 57) Cartwright, Thomas (1535 1603), イギリスの神学者。ケンブリッジ大学教授 (1569), 熱烈な清教徒で国教会を批難して免職された (1570)。なお, マグダレン・カレッジのフェローの上にカトリックの首長を置こうとするジェームズⅡ世の意図を支持した同名のソルズベリーの監督は彼の孫 (1634 1689) といわれる。[前出 『岩波西洋人名辞典』 p. 343, 岩波書店]
- 58) Ridley, Nicholas (1500頃 1555), イギリスの宗教改革者・宮廷付司祭。カンタベリーの司教座聖参事会員 (1541), ロチェスターの司教 (1547), ロンドンの司教となる (1549)。この間, ローマ教会に対する疑惑の念を高め, クランマーを助けて改革的説教を唱え, メアリーⅠ世の即位と共に化体論的聖餐論を否定したという嫌で捕えられロンドン塔に投ぜられた (1553)。のちオクスフォードでラティマーと共に焚殺された。[前出 『岩波西洋人名辞典』 p. 1648, 岩波書店]
- 59) James I と Charles I のこと。スチュアート朝については, スコットランド (1371 1714) のちにイングランド (1603 1714) に君臨した王家の名称。
- 60) 『The Compleat Gentleman』 (1622)
- 61) Peacam, Henry, the younger (1576頃 1643頃), イギリスの著述家。絵画・音楽をよくし, また紋章学の研究者, 数学者であった。美術に関する実際論 『Graphice』 (1606) を書き, のちこれを 『The Gentleman's Exercise』 と改題して版を重ねた。修身書 『The Compleat Gentleman』 (1622) が彼の主著。[前出 『英米文学辞典』 p. 808, 研究社]
- 62) James I (1566 1625), イングランド王 (1603~25)。スコットランド王としてはジェームズⅥ世 (1567 1625)。スコットランド女王メアリ・スチュアートとその第二の夫ダーンリの子, イングランド王ヘンリⅧ世の玄孫。エディンバラに生れ, 母の退位により生後約1年で即位。親政を始めてからは (1583), 貴族を王権に服従させることに成功。エリザベスⅠ世の死後イングランド王位をも継承し (1603), グレート・ブリテンが初めて同君連合の下に置かれた。イングランドの国情にうとく, 自ら論文を書いて王権神授説をかざして議会と衝突し, ハンプトン・コートの会議で国教主義を強調して新旧両教徒の信を失い, 清教徒を失望させ (04), 旧教徒の火薬陰謀事件をひき起した (05)。議会は事毎に王の政策を批判し, 王は議会の承認を得ないで課税しようとした。王の外交政策, 特に王子 (のちのチャールズⅠ世) のスペイン王女との縁談は最も評判が悪かった。容貌醜く, 初代バキングラム公等の美男子を愛し, 衛学的で「最も賢明な愚人」と評され, チャールズⅠ世の時代に重大な憲法上の紛議の種を残した。〔主著〕 The true law of free monarchy, 1603。
- 63) 『Basilikon Doron』
- 64) Wilson, Arthur (1595 1652), イギリスの歴史家, 劇作家。『The Inconstant Lady, or Better Late than Never』 (1630), 『The Swissen』 (1631) などの戯曲のほか, 『History of Great Britain, being Life and Regin of James I』 (1653) がある。[前出 『英米文学辞典』 p. 1208, 研究社]
- 65) Buckingham, George Villiers, 1st Duke of (1592 1628), 英国の廷臣, 政治家, 軍事指導者, (lord high admiral) [前出 『英米文学辞典』 p. 212, 研究社]
- 66) 訳者注 'leper' を leaper [跳躍する人] にかけたものだと考えられる。
- 67) 『Annals of King James and King Charles』, 作者不明。
- 68) 『The King's Book of Sports.』, King James I. Robert Baker (printer), London 1618 and many editions. A declaration of the sports to be permitted after church on Sundays. [『The Guide to Britis Track and Field Literature 1275 to 1968』 P. 9, Athletics Areana 社]

- 69) 「イングランドの戦争と政治に新しい時代を開くことになったこれらのイースト・アングリア連隊は「鉄騎隊」(アイアンサイズ)というあだ名で世間に最もよく知られるようになった。もっともこの名前は彼らの指導者自身に対して最初はつけられたものであったが、彼らこそはニュー・モデル軍とのちの全クロムウエル軍の起源であった。」[G. M. トレヴェリレアン, 大野真弓監訳『イギリス史 2』p. 142, みすず書房]
- 70) the Restoration, 1660年2月, スコットランド軍司令官モンクは, 亡命中のチャールズ(チャールズⅠ世の子)と平和交渉を開始。チャールズは, プレダの宣言を発し, 議会もこの条件をいれて, 「この王国の古来の伝統なる基本的法律によって, 政府は国王と上下両院より成るべきものである」と決議し, 王制復古となった。[大野真弓編『イギリス史(新版)』p. 165, 山川出版]
- 71) 『The Anatomy of Melancholy』, 「憂鬱の解剖」Robert Burtonの著, 1621年 Democritus Juniorの仮名で出版。元来は医学の書であるが, 憂鬱は万人生得の病気であることから説きおこし, その定義・原因・徴候・性質・治療法などにおよび, 次に恋と宗教との憂鬱を説く。筆はさらに延びて政治・社会の改良, 心身の健康を論じ, 人世百般の事象にわたる。その所論には humour と pathos とがかねそなわり, 著者の宗教上の寛容心も著しい。古今の典籍からの博引傍証によって, あたかも雑学の宝庫の観がある。[前出『英米文学辞典』p. 25, 研究社]
- 72) Burton, Robert (1577-1640), イギリスの牧師。Dr. Johnson や Lamb が愛読した『The Anatomy of Melancholy』(1621)は元来医書であるが, 奇書・珍本からの引用にとみ, 雑学の宝庫の観があり, イギリス散文の一傑作。この作中で著者は, 自らを 'Democritus Junior' と呼んでいる。[前出『英米文学辞典』p. 139, 研究社]
- 73) 『Gentlemans Magazine』
- 74) 『Weekly Intelligencer』
- 75) 1887年度に出た初版では, この記録は1時間58分44秒となっている。2203年現在の世界最高記録は1時間39分14秒4である。
- 76) Maypole, 五月柱(広場に立てる花やりボンで飾った高い柱。May Day にその周囲を舞踏する)[前出『新英和辞典』p. 1088, 研究社]
- 77) Charles II (1630-1685), 英国ならびにアイルランドの王(1660-1685在位), クロムウエル革命後の「王政復古」で王となった。[前出『新英和辞典』p. 272, 研究社]
- 78) Pepys, Samuel (1633-1703), イギリスの有名な日記作家『Diary』は, Wheatley, H. B. の編集で1825年に発行されている。1660年1月1日から1669年5月31日迄の日記が掲載され, わが国でも抜萃の翻訳書がいくつか出版されている。[前出『英米文学辞典』p. 815, 研究社]
- 79) Monmouth, Duke of. (1649-1685), チャールズⅡ世の庶子。「チャールズⅡ世には嫡子がなく, カトリック教徒たる王弟ジェームスが憲法上王位相続人であったが, ウィッグ党は新教徒たるモンマス公を王位相続者とするため1679年王位継承排斥法案を提出した。」[前出『イギリス史(新版)』p. 172, 山川出版]
- 80) Macaulay, Thomas Babington, 1st Baron (1800-1859), イギリスの歴史家・政治家。ホイッグ党員で1830-34, 39-47, 52-56年下院議員。メルボーン内閣の陸相1839-41。ラッセル内閣の主計総監1846-47, グラスゴー大学総長1849, などをつとめた。[前出『英米文学辞典』p. 631, 研究社]
- 81) 『History of England』5巻(1848-61)は, ホイッグ党偏向のきらいはあるが, 大いに名声を博した歴史書である。[前出『英米文学辞典』p. 469, 研究社]
- 82) 六尺棒のことで, 昔英国農民が用いた武器, 17世紀までは剣技にも用いた。6~8フィート(=183~244 cm)の木棒で両端に鉄の金具が付いている。[前出『英和辞典』p. 1430, 研究社]
- 83) ここでは, 前出78)のピープスのこと。
- 84) ここでは79)のモンマス公のことだと思われる。
- 85) 『Luttrell Papers』は Luttrell, Narcissus (1657-1732), [イギリスの年代記作家・書誌学者]の『A brief historical relation of state affairs from September 1676 to April 1714』(1857)のことを指

- していると思われる。[前出『英米文学辞典』p. 626, 研究社]
- 86) 「20cwt」, 1cwt は重量の単位で、イギリスでは112ポンド (=50.8 kg) のことである。したがって、ここでは約 1000 kg もの重さを挙げたことになり、この話が、きわめて誇張されたものであるかがわかる。
- 87) 『Notes and Queries』, 1849年 Thomas, W. J. が創刊した週刊誌。今は月刊。作家、美術家、科学者らが寄稿して、各人の意見や考証などを発表している。[前出『英米文学辞典』p. 758, 研究社]
- 88) wake とは一般に「英国教会で行われている『献堂記念祝祭』の前夜に行なう通夜〔この習慣は地方に残存している〕のことをいう」。[前出『新英和辞典』p. 2023, 研究社]
- 89) Burton 72) 参照。
- 90) The Great Rebellion, 1642~1660年の内乱と「共和政治の時代」を指す。大反乱の時代のこと。[前出『新英和辞典』p. 757, 研究社]
- 91) Stow, Jhon (1525? 1605), イギリスの年代記筆者、好古者。エリザベス朝時代の最も正確なまた事務的な史家と評せられた。M. Darker 大主教の保護を受け、『The Workers of Geoffrey Chaucer』(1561) 等を編集した。[前出『英米文学辞典』p. 1047, 研究社]
- 92) 『A Survey of London』(1598, 1603), Stow のあらかわしたロンドン風物誌。当時のロンドンの風俗を知るのに貴重な資料である。[前出『英米文学辞典』p. 1056, 研究社]
- 93) Strype, Jhon (1643 1737), イギリスの宗教史家、伝記作家。主としてチューダー王朝〔1485 1603〕時代関係の莫大な記録を集め、多数の著作を出した。Stow の『A Survey of London』の改訂・増補版を1720年に出した。[前出『英米文学辞典』p. 1051, 研究社]
- 94) Maitland, Sir Richard, Load Lethington (1496 1586), スコットランドの政治家、諷刺詩人。ジェームズV世およびMary 女王に用いられた。彼の収集したスコットランド詩集に自作の詩を加えたものは1786年に公刊された。[前出『英米文学辞典』p. 643, 研究社]
- 95) 『The Spectator』, 1711年3月1日 R. Steele および J. Addison 創刊の刊紙。Sir Roger de Coverley, Will Honeycomb, Sir Adrew Freeport, Captain Sentry など仮想人物を会員とするクラブが発行する形式をとっている。内容はThe Tatler の継承で風習、主として文学に係る上記二人の随筆であるが、性格描写としてのSir Roger de Coverley や寓話物語『Vision of Mirza』などがとくに有名である。1712年12月6日555号で廃刊。1814年, Addison が復興したが80号で廃刊した。[前出『英米文学辞典』p. 1023, 研究社]
- 96) Addison, Joseph (1672 1719), イギリスのエッセイスト、詩人、政治家。前述の『The Spectator』の著者の一人である。[前出『英米文学辞典』p. 6, 研究社]
- 97) James I (1566 1625), 英国王(1603 1625在位)。スチュアート家初代の王でその治世中に『英訳聖書(Authorized Version)』が完成した。スコットランドのジェームズVI世(1567 1625)でもある。[前出『英米文学辞典』p. 935, 研究社]
- 98) Chrles II 77) 参照。
- 99) Hone, William (1780~1840), イギリスの文人・書籍商。[前出『英米文学辞典』p. 478]
- 100) 『The Everyday Book』(2巻, 1826~1827) は Hone の著書で、Charles Lamb に献げられ、W. Scott, Southey らの称賛を博した。[前出『英米文学辞典』p. 478, 研究社]
- 101) Brown, Thomas (1663 1704), イギリスの諷刺作家。通称「Tom Brown」乱行で有名。『I do dot love thee, Dr. Fell』という『ざれ歌』で知られた。[前出『英米文学辞典』p. 127, 研究社]
- 102) 『The Virginians』(1857年11月作), サッカレーが1852年アメリカに講演旅行しその見聞を材料にして、1857~59年『Henry Esmond』の続編として発表した作品。双児の兄 George と弟 Harry Warrington の運命を中心にした物語。[前出『英米文学辞典』p. 1155, 研究社]
- 103) Thackeray, Willam Makepeace (1811 1863), イギリスの有名な小説家。数々の作品を発表している。[前出『英米文学辞典』p. 1082, 研究社]
- 104) 『Man and Wife』, 1870年にコリンズによって書かれた小説。

- 105) Collins, William Wilkie (1824-1889), イギリスの小説家。1851年 Dickens に会い翌年から『Household Words』に寄稿を始め、1856年以後同誌の編集に参加した。[前出『英米文学辞典』p. 201, 研究社]
- 106) 『The Lady of the Lake』, スコットが1810年に発表した長篇詩である。[前出『英米文学辞典』p. 569, 研究社]
- 107) Scott, Sir Walter (1771-1832), スコットランドの詩人, 小説家, 弁護士。[前出『英米文学辞典』p. 962, 研究社]
- 108) 「1 rood」長さの単位で地方によって異なるが、5.5から8フィート(=167~242 cm)に相当する。[前出『英和辞典』p. 1533, 研究社]
- 109) 『Rebecca and Rowena』, これは『Rebecca and Rowena a Romance upon Romance』というサッカーの滑稽小説(1850年作)。Scott 作の『Ivanhoe』の後日談で、結局 Ivanhoe はキリスト教徒になって、Rebecca と結婚する話。[前出『英米文学辞典』p. 887, 研究社]
- 110) リチャード獅子心王とは、リチャード1世(1189年-1199年在位)のことである。
- 111) 『Geoffrey Hamlyn』(1859年作)は、キングスリーが、オーストラリアに滞在中の経験にもとづいて、種々の事情で故国を出る植民者が、同地で送る生活をなまなましくかいた作品である。[前出『英米文学辞典』p. 382, 研究社]
- 112) Kingsley, Henry (1830-1876), イギリスの小説家。[前出『英米文学辞典』p. 560, 研究社]
- 113) 『Diary』, 85) 参照。
- 114) Walter Thom が1813年に『ペDESTリアニズム。別名、前世紀と今世紀の間の有名なペDESTリアンの業績についての物語。パークレー大尉の公式・非公式な試合についての詳細な物語とトレーニング上の論文も備えられてある。』(アバディーンの Brown and Frost から出版)という書物のこと。この一文はこの中からの引用と思われる。
- 115) 同上114) 参照。
- 116) この部分は初版にはない「これは故トルマッシュ卿が生きておられた1887年に書かれたものである。」との著者注がある。
- 117) 馬が転倒したときのことを面白く表現しているのであろうと思われる。
- 118) “chase”とは本来野外障害物競馬のことであるから、この場合走る選手を「馬」(horse)になぞらえたものと思われる。
- 119) これは聖書ルカ伝17章10節の文章で「義理一遍の人」「役目以外には何一つ進んでしない人」の意であるが、ここでは、著書は古い競技者たちが、様々な種目を熟していた事を述べたかったのだと思われる。[前出『新英和辞典』p. 1960, 研究社]
- 120) 初版本(1889年版)ではNo. 4 になっている。
- 121) このバドミントン・ライブラリーの編者(eighth) duke of Beaufort, K. G. のこと。‘Who was who Vol. 1, 1897-1915’ Adam & Charles Blak, London p. 50 には、ビュフォート公のことが次のように記載されている。

「BEAUFORT, 8th Duke of (cr. 1682) Henry Chales Fitz Roy Somerset, K. G., Baron Botetourt, 1305, confirmed, 1803; Baron Herbert of Ragland, Chepstow, and Gower, 1506; Earl of Worcester, 1514; Marquess of Worcester, 1642. Lord-Lieutenant of Monmouth; b. 1 Feb. 1824. S. father 1853; m. Georgiana, d. of 1st Earl Howe, 1845. Educ.: Eton. Liet. 1st Life Guards, 1841; Capt. 7th Hussars, 1847; Lieut.-Col. in army 1858, retired 1861; M. P. East Gloucestershire, 1846-53; Master of the Horse; 1858-59, 1866-68. Owned about 52,000 acres. Heir: s. Marquess of Worcester, b. 1847. Adress: Stoke Park, nr. Bristol. Club: Carlton. [Died 30 Apr. 1899.]」

また、当時の彼の財産や生活については、「たとえば、1845年バウフォート公の長男、ウスター侯の成人式には、バドミンントンの館に200人の借地農が集り、雄牛一匹がローストにされ、宴会などの祝賀行事が一週間も続いたと記録されている。」(P. 294) と述べられている他、「貴族は概して超大

- 地主で、その所有地は最低で1万エーカー、(=約4046 ha)人によっては5万エーカー〔地代収入は、普通1エーカーにつき1ポンド〕にも及んだ。田舎に構えた邸宅は豪壮そのもので、執事、家庭教師、女中、料理人、門番、輿車など数十人、人によっては百人以上の召使いを雇い、一方ロンドンに屋敷を構えて、……」(p. 293)と示されるような生活を過していたようである。[角山栄『産業革命と民衆』生活の世界歴史10, 河出書房新社, 1977]
- 122) Oxford University Boat Club のこと。
- 123) 1788年創設の名門のクリケットのクラブ Marylebone Cricket Club のこと [Peter McIntosh 『Sport in Society』 p. 63, West London Press 1987]
- 124) 'hare and hound's', 「紙まき鬼ごっこ」はうさぎになって紙片〔scent〕をまき散らながら逃げる二人の子どもを他の大勢が獺犬になって追いかける遊戯, [前出『英和辞典』 p. 791, 研究社]
- 125) この部分には初版にはない「1837年と1838年にわれわれはイートン校の教師 (tutor) や舎監 (dame) の寄宿舎の多くで、ハードル競走をおこなった。それは私がその頃そこでそうしたレースに出て勝った事実から、そのことを知っているのである。10台のハードルを跳び越える100ヤードがいつものコースであった。」との編者 Beaufort 公の注釈がある。
- 126) 現在の I・A・A・F ルールでは、110 mH はこの高さで行っている。
- 127) Wilkinson, Henry F のこと, 6) 参照。
- 128) ここでは Sister University と記されている。
- 129) 初版本では 'prizes' でなく 'purses' (賞金) となっている。
- 130) ラテン語で 'Everything unknown is supposed to be something magnificent' の意で「すべて未知のものは偉大なるものと考えられる」という Tacitus, Agricola 30. からの一文。[田中秀央・落合太郎編『ギリシャ・ラテン引用語辞典』 p. 518, 1966, 岩波書店]
- 131) 訳者注。下記のプログラムは 'Oxford Versus Cambridge. A Record of Inter-Versity Contests 1827-1930' by Harold M. Abrahams and J. Burce Kerr. Faber and Faber, London. 1931. の p. 2 よりコピーしたものであるが、日付は Shearman 卿著の3月3日と異って3月5日土曜日となっている。また Wilkinson Henry F. 著の『Modern Athletics』(1868) p. 91 の同大会報告も3月5日となっている。これらのことから、この日付については Shearman 卿が誤って3月3日としているので訳文では3月5日としておいた。

1864

Saturdays, 5 March. Christ Church Ground, Oxford

Tie 4-4

- 100 YARDS. *B. S. Darbyshire 1; *A. H. Harrison 2; H. C. Follye 3; E. F. Wayne 4. Won by ½ yard. Time 10½ sec.
- 440 YARDS. *B. S. Darbyshire 1; *A. H. Harrison 2; W. E. Heap 3; P. M. Thornton 4. Won by 4 yards. Time 56 sec.
- ONE MILE. *C. B. Lawes 1; *A. Harnarn 2; P. M. Thornton 3; F. S. Warman 4; G. B. Streeten 5. Won by 4 yards. Time 4 min. 56 sec.
- STEEPLECHASE. *R. C. Garnett 1; R. E. Webster 2; *A. Grant 3; T. Wood 4; G. M. B. Clive 5. Won by 6 yards. Time 10 min. 34 sec.
- 120 YARDS HURDLES. *A. W. T. Daniel 1; E. H. Wynne-Finch 2; C. Bill 3; *E. B. Michell 4; H. Skelton 5; R. Kerrison. Won by 6 yards. Time 17¾ sec.
- 200 YARDS HURDLES. E. H. Wynne-Finch 1; *A. W. T. Daniel 2; *H. Skelton 3; C. Bill 4; E. B. Michell 5; A. C. Onslow. Won by 6 inches. Time 26¾ sec.
- LONG JUMP. *F. H. Gooch (18 ft.) 1; *C. Booth (17 ft. 4½ in.) 2; W. S. Wright (16 ft. 11½ in.) 3; T. M. Davenport.
- HIGH JUMP. *F. H. Gooch (5 ft. 5 in.) 1; *G. M. Osborn (5 ft. 4 in.) 2; C. Wyatt Smith (5 ft. 1 in.) 3; R. A. Gatty (5 ft.) 4.